

は	ば	あけぼの	い	せき
羽	場	曙	遺	跡
ほう	がく	ひがし	い	せき
方	角	東	遺	跡

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

は	ば	あけぼの	い	せき
羽	場	曙	遺	跡
ほう	がく	ひがし	い	せき
方	角	東	遺	跡

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

序

羽場曙遺跡・方角東遺跡が位置する丸山・羽場地区は、飯田城下の西側に位置し、飯田の象徴一風越山を間近に仰ぎ、名水百選にも選ばれた猿庫の泉に多くの人々が訪れるなど、豊かな自然に恵まれたところです。また、重要文化財白山社奥社本殿や白山社隨身門をはじめ多くの文化財に恵まれ、文化的息吹が感じられます。

多くの地方都市に見られるように、飯田市でも近年主要幹線道路の整備とともに市街地が拡大し、店舗・事業所が郊外に移転するなど、市中心街地の空洞化が深刻な問題となっています。丸山・羽場地区もこうした市街地化の波に早くから影響を受けた地域の一つで、道路や下水道などのインフラの整備が求められてきました。昭和62年度からの土地区画整理事業（丸山・羽場1地区）に引き続き、今回第2地区的工事が計画されたわけですが、区画整理事業を通じてよりよい住環境の実現を図るものとしてその必要性が考えられます。

しかし、このような変化の中でも文化財の保護という面も考えなければならず、時として相容れない事態に直面することもあります。それ故、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることも止むを得ないことといえましょう。

今回の調査では弥生時代から古墳時代にかけての居住域、墓域等が調査され、これまでの発掘調査の成果と合わせて当時のムラや生活の様子が明らかになりました。

文化財保護活動により、地域の歴史が次第に明らかになりつつありますが、調査記録をとどめた報告書が活用されてはじめて地区および市域の方々の財産として生命を与えられることになり、そうなることを切に望む次第です。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただきました地元関係者の皆様をはじめとして、本調査に関係された全ての方々に深く感謝を申し上げます。

平成20年3月

飯田市教育委員会

教育長 伊澤宏爾

例　言

1. 本書は土地区画整理事業（丸山・羽場第2地区）羽場公園建設他に先立って実施された、飯田市羽場町所在の羽場曙遺跡・方角東遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市建設部建設管理課の委託を受け、飯田市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、平成15～19年度に現地作業及び整理作業を行ない、同19年度に報告書作成作業を行った。
4. 発掘作業、整理作業にあたり、遺跡略号として羽場曙遺跡はHBA、方角東遺跡はHGHとし、地番を付して用いた。
5. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。
竪穴住居址、竪穴-SB　掘立柱建物址-ST　方形周溝墓-SM　土坑-SK　溝址-SD
6. 土層の色調、土性については、小山正忠・竹原秀男2005『新版標準土色帖』を用いている。
7. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により羽生俊郎、坂井勇雄が行った。
8. 本書は羽生俊郎、坂井勇雄が執筆・編集し、山下誠一が校閲した。各章の執筆は以下のとおりである。
第1～3章　坂井勇雄　　第4～5章　羽生俊郎
9. 調査にあたり、基準点測量を㈱ジャステック、㈲エムツークリエーションに委託した。
10. 遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。
11. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市川路1004-1 飯田市考古資料館に保管している。

目 次

本文目次

序	第1節 6-6、3-6-38号線 (HBA613-2) 7
例言	第2節 試掘・立会調査 14
目次	第3節 まとめ 14
第1章 経過	第4章 方角東遺跡
第1節 調査に至る経過と過程 1	第1節 5-1号線 (HGH558) 19
第2節 調査の経過 1	第2節 羽場公園 (HGH760) 23
第3節 調査組織 3	第3節 試掘・立会調査 34
第2章 遺跡の環境	第4節 まとめ 34
第1節 自然環境 5	第5章 総括 36
第2節 歴史環境 5	引用参考文献 39
第3章 羽場署遺跡	抄録 59

挿図目次

挿図1 調査の経過 2	挿図14 HGH760トレンチ位置図 22
挿図2 調査遺跡位置図 4	挿図15 HGH760遺構分布図 23
挿図3 事業地及び調査位置図 7	挿図16 基本層序 23
挿図4 HBA613-2遺構分布図 8	挿図17 SM06 25
挿図5 基本層序 9	挿図18 SM07・08・ST01・SK66・67 26
挿図6 SB06~11 11	挿図19 HGH760出土遺物 27
挿図7 SD16・17・SK22~26 13	挿図20 HGH760 小穴割付図 28
挿図8 HBA613-2出土遺物(1) 16	挿図21 HGH760 割付図(1) 29
挿図9 HBA613-2出土遺物(2) 17	挿図22 HGH760 割付図(2) 30
挿図10 HBA613-2出土遺物(3) 18	挿図23 HGH760 割付図(3) 31
挿図11 HGH558遺構分布図 19	挿図24 HGH760 割付図(4) 32
挿図12 基本層序 19	挿図25 HGH760 割付図(5) 33
挿図13 SM05・SK61~65 21	挿図26 集落の立地 37

図版目次

図版 1 羽場曙遺跡		図版11 羽場曙遺跡出土遺物	
SB06・同出土状況・SB07	41	SB08・09	51
図版 2 羽場曙遺跡		図版12 羽場曙遺跡出土遺物	
SB08・同炉址・同炉断面	42	SB09・CX09	52
図版 3 羽場曙遺跡		図版13 方角東遺跡 (HGH558)	
SB10・SB09 (15年度調査)		調査区全景・SM05断面	53
SB09 (16年度調査)	43	図版14 方角東遺跡 (HGH558)	
図版 4 羽場曙遺跡		SK64・65・作業風景	54
SB11・SD16・17	44	図版15 方角東遺跡 (HGH760)	
図版 5 羽場曙遺跡 SK22~24	45	調査区全景	55
図版 6 羽場曙遺跡		図版16 方角東遺跡 (HGH760)	
SK25・26・CX09出土高杯	46	SM06・07・08	56
図版 7 羽場曙遺跡 調査区全景	47	図版17 方角東遺跡 (HGH760)	
図版 8 羽場曙遺跡		ST01・SK66・SK67	57
重機作業風景・作業風景	48	図版18 方角東遺跡 (HGH760)	
図版 9 羽場曙遺跡出土遺物		作業風景・重機作業風景・	
SB06・07	49	測量作業風景	58
図版10 羽場曙遺跡出土遺物			
SB07・08	50		

第1章 経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成2年11月2日 飯田市長 田中秀典より飯田市羽場町における土地区画整理事業（丸山・羽場第2地区）の計画が提示され、開発に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協議依頼書が提出された。事業計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地羽場曙遺跡・方角東遺跡にかかり、事業主体である飯田市建設部・長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者が、平成2年12月14日現地協議を実施した。この際、飯田市教育委員会が平成2年度の市内遺跡詳細分布調査（旧市）を予定していたため、平成3年5月28日、調査結果に基づいて改めて協議した。その結果、年度毎の施工箇所について、その計画年度の前年度に試掘調査を行ない、試掘結果に基づいて再協議することになった。諸協議に基づいて、次節のとおり試掘・本発掘調査・立会調査等を実施した。挿図1中の①～⑯は、下記の調査箇所に対応している。なお、平成14年度以前のものについては、「羽場曙遺跡 方角東遺跡」（2003年3月飯田市教育委員会）に詳細が記載されている。

第2節 調査の経過（挿図1）

（1） 平成15年度

平成15年5月16日付及び平成15年10月9日付で、飯田市建設部長 藤本照之と飯田市教育委員会次長 尾曾幹男との間で委受託の協定を締結し、下記の事業を実施した。

羽場曙遺跡 3-3-4号線を6月19日に試掘調査（①）。6-2号線を12月16日に試掘調査（②）。

6-6号線を10月10日～同23日まで、立会調査（③）、発掘調査（④）。

方角東遺跡 6-33号線の北側を8月6日に、6-33号線の南側を10月23日に試掘調査（⑤）。

6-32号線を2月4日に試掘調査（⑥）。

（2） 平成16年度

平成16年4月1日付で、飯田建設部長 藤本照之と飯田市教育委員会次長 尾曾幹夫との間で委受託の協定を締結し、下記の事業を実施した。

羽場曙遺跡 3-6-38号線（平成15年度発掘調査実施の6-6号線隣接地）を5月24日～6月1日まで試掘調査（⑦）・発掘調査（⑧）。6-21号線を7月30日に立会調査（⑨）。

方角東遺跡 5-2-2号線を7月23日～同26日に試掘調査（⑩）。

（3） 平成17年度

方角東遺跡 4-10号線を7月14日に立会調査（⑪）。

5-1号線を7月15日～同20日に試掘調査・発掘調査（⑫）。



挿図1 調査の経過

(4) 平成18年度

羽場曙遺跡 羽場1号公園を7月24日に試掘調査(⑦)。

方角東遺跡 羽場2号公園を11月6日に試掘調査(⑬)。

羽場公園を1月10日～同12日に試掘調査(⑭)。

(5) 平成19年度

平成19年5月7日付で、飯田市建設部長 中國雅と飯田市教育委員会次長 関島隆夫との間で委受託の協定を締結し、下記の事業を実施した。

方角東遺跡 羽場公園地点を7月9日～8月21日まで試掘調査・発掘調査(⑮)。

8月10日には現地見学会を実施し、広く市民に公開した。

飯田市考古資料館において両遺跡の整理作業を行ない、発掘調査報告書を刊行した。

第3節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会

教育長	富田 崇啓	(～平成17年3月3日)	伊澤 宏爾	(平成17年3月4日～)
調査担当者	佐々木嘉和	馬場 保之	坂井 勇雄	羽生 俊郎
調査員	瀧谷恵美子	吉川 金利	下平 博行	
作業員	伊藤 孝人	金井 照子	唐沢古千代	小島 康夫
	椎名 祥二	杉山 春樹	関島真由美	竹本 常子
	中平けい子	中山 敏子	服部 光男	福沢トシ子
	三浦 照夫	宮内真理子	森藤美知子	松下 省三
			吉川 悅子	

(2) 事務局

飯田市教育委員会

教育次長	尾曾 幹男	(平成15～16年度)	中井 洋一	(平成17～18年度)
	関島 隆夫	(平成19年度～)		
生涯学習課長	小林 正春	(平成15～18年度)		
生涯学習・スポーツ課長	宇井 延行	(平成19年度～)		
文化財保護係長	吉川 豊	(平成15～16年度)	馬場 保之	(平成17～18年度)
	山下 誠一	(平成19年度～)		
文化財保護係	宮澤 貴子	(平成17年度～)	瀧谷恵美子	
	佐々木行博	(～平成16年度)	吉川 金利	(～平成15年度)
	下平 博行	(平成16年度～)	伊藤 尚志	(～平成15年9月)
	坂井 勇雄	(平成16年度～)	羽生 俊郎	(平成15、17年度～)



挿図2 調査遺跡位置図

第2章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市羽場町・羽場権現は飯田市街地の西側に位置する。

飯田市は伊那山脈と木曽山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

本書に連する羽場曙遺跡・方角東遺跡および飯田市街地が立地する場所は、南を飯田松川により、また北側を野底川により区切られた段丘上に立地する。この段丘上には、風越山麓から扇状地が発達し、東端の段丘端部（標高500m）から風越山麓（標高600m）までの比高差100mの間に緩やかな傾斜で一連の面となっている。このことは、本来の段丘地形が存在しないわけではない。風越山麓からの段丘地形が発達したことにより上位の段丘地形が扇状地に覆われていること、さらに、市街地化の進行により微地形の判断が困難であるためである。その証拠として、本遺跡西側の権現堂前遺跡と更に西側の権現堂遺跡の間には約20mの比高差があることがあげられる。さらに、こうした段丘部分では、河川が下刻作用から堆積作用に転じ扇状地が形成されるものと考えられる。この一見連続して捉えられる段丘上での羽場曙遺跡・方角東遺跡の位置は、段丘面上のほぼ中央部で若干松川寄りの、風越山麓から発達した扇状地上にある。段丘上における位置からみて、羽場曙遺跡・方角東遺跡周辺は標高530m前後であり扇状地の先端部付近と考えられ、段丘上にみられる王竜寺川・源長川・阿弥陀沢川・円悟沢川等小谷川により微地形が複雑に変化する部分である。

羽場曙遺跡は源長川・阿弥陀沢川と円悟沢川、方角東遺跡は円悟沢川と段丘縁辺部の間にある。全体的には起伏に富んでおり、丘陵部と凹地部が縞状にみられ、凹地部においては小湿地が発達した部分もある。

なお、丸山・羽場地区では、これまでの本発掘・試掘・立会調査結果で、縄文時代から弥生時代の間に堆積した洪水に起因する黄褐色砂・黄褐色砂質土が広範囲に認められる。しかし、羽場曙遺跡・方角東遺跡は風越山麓裾部から500m前後と離れ、通常自然災害を受けにくい場所で、全体的にみると古くから生活の適地であったと考えられる。

第2節 歴史環境

旧石器時代については、市内では後期以前にさかのぼる可能性のある遺跡として石子原遺跡と竹佐中原遺跡がある。これ以外には断片的に遺物が出土している程度で、この時代の様相を詳述できる材料がないのが現状である。本地区では、美術博物館建設に先立つ飯田城跡の発掘調査で細石刃核が出土している。

縄文時代早期では湯渡（権現堂前）遺跡・正永寺原遺跡・押洞遺跡等で押型文土器の破片が見つかっている。中期になると正永寺原遺跡・権現堂前遺跡・押洞遺跡・大門町遺跡に遺構、遺物が見られるよ

うになる。

続く、水稻栽培を経済基盤とする弥生文化の下伊那への波及は縄文時代晚期終末のことであり、美濃・尾張・三河方面から東漸したものと考えられている。旧市内における弥生時代の代表的遺跡として、権現堂前遺跡・さつみ遺跡（以上方角東遺跡に含まれる。長野県教委 1971）、羽場曙遺跡・正永寺原遺跡・古屋垣外遺跡（同前）・丸山遺跡（飯田市教委 1988）等があり、後期の遺跡が多く見られる。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期各地区に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。この時代に方角東遺跡・羽場曙遺跡では、堅穴住居址・方形周溝墓等が調査され、散在的な集落景観が把握されているし、飯田城下町遺跡でも方形周溝墓が調査されている。こうした状況は、他地区の高位段丘上に立地する遺跡と共通しており、風越山の裾部や扇状地端部付近で発達する湧水や、小河川沿いで水田經營が随所にあったことが予想される。

古墳時代にはこの時代の最も特徴的な事象として古墳の築造があり、上飯田地区内にも数基の古墳が存在したことが伝えられているが、現在は市街地化の進行により残存するものは木戸脇古墳・杵が塚古墳のみである。また、寛政年間に松平楽翁が著した『集古十種』銅器一の部の古鏡図によって飯田城下町遺跡内にも古墳があったことが知られる。該期の集落は丸山遺跡で調査されており、相当規模の集落の存在が考えられるが、なお断片的に把握されているにすぎない。

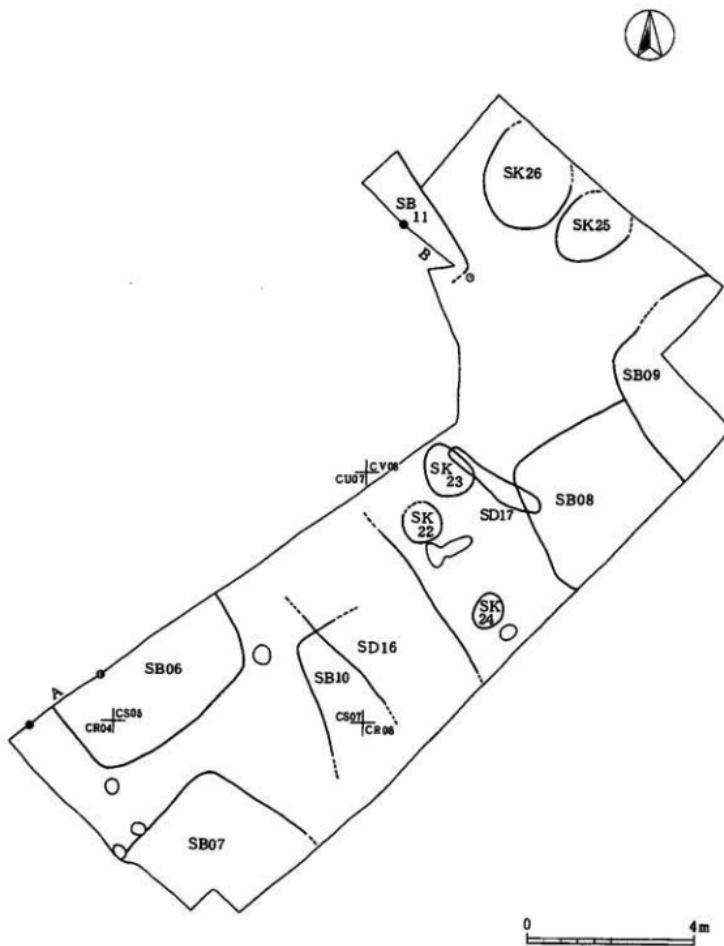
続く奈良・平安時代の状況は不明な部分が多いが、箕瀬遺跡（飯田市教委 2002）において平安時代の住居址4軒が調査されており、集落は存在する。

中世に至って、それぞれの詳細な築城時期は不明ではあるが、飯田城・愛宕城・上飯田の城山・虚空蔵山頂等に山城が造られ、一定の集団による活動があったことを推し計ることができる。未報告であるが、飯田城跡の発掘調査では、近世城郭に先立つ遺構として、空堀2本と小規模な方形の堅穴が約60軒検出されている。

近世の考古学的成果として、飯田城跡二の丸、本丸発掘、出丸発掘、北堀発掘、飯田城下町遺跡（伝馬町・本町）の発掘、風越窯址の調査がある。飯田城跡二の丸、本丸発掘、の大半についてはいずれも未報告であるが、二の丸跡では、大通り跡・屋敷の礎石・柱穴・御用水・井戸・池・鍛冶施設・貯蔵施設・ゴミ捨ての大穴等の遺構、陶磁器類・焼塩壺・硯等が出土している。本丸跡からは池の一部が、出丸跡では暗渠と思われる石組遺構（飯田市教委 2002）、北堀跡では北堀及び追手口土橋の位置が把握された（飯田市教委 2006）。飯田城下町遺跡内の伝馬町の発掘では、武家屋敷の主屋の一画が調査され、3期の遺構の変遷が把握されている（下伊那教育会 1988）。また、本町の発掘調査では町屋の一画が調査され、上級商家の生活の様子が明らかにされた（飯田市教委 2001 2006）。さらに、風越窯址では2基の窯跡が調査されている。遺物は完形品こそないが、染付けの磁器・青磁・白磁があり、優品が焼かれたことを示す好資料を得ている（飯田市教委 1979）。



挿図3 事業地及び調査位置図



挿図4 HBA613-2 遺構分布図

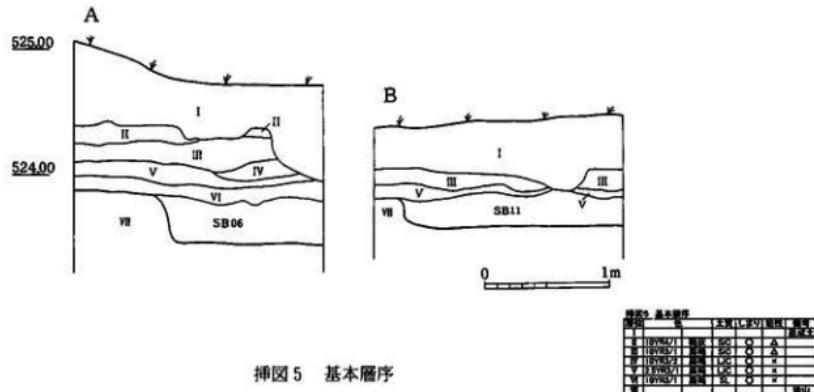
第3章 羽場曙遺跡

第1節 6-6、3-6-38号線 (HBA613-2) (挿図1-④)

第1項 調査区の設定

調査区について、平成15年度は当初日本測地系に基づいて設定されていたが、平成16年度より世界測地系に移行したため新飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図により再設定した。今次調査区はVII-LC74 17-32に位置する。

第2項 基本層序 (挿図5)



挿図5 基本層序

第3項 遺構・遺物

(1) 穫穴住居址

① 6号住居址 (SB06) (挿図6 図版1・9)

遺構 平成15年度調査で確認した遺構であり、CS-05を中心に検出した。北側の一部が調査区外のため全体の2分の1を調査した。規模は確認可能な一辺が4.9mを測り、平面形は隅丸方形を呈す。主軸方位は不明である。検出面から床面までの掘り込みは47cmで、ほぼ垂直である。床面は軟弱で、主柱穴と思われるピットが2基確認されている。

遺物 (挿図8・10) 壺・壺・石包丁・磨石

時期 遺物より弥生時代後期終末と考えられる。

② 7号住居址 (SB07) (挿図6 図版1・9・10)

遺構 平成15年度調査で確認した遺構であり、CQ-06を中心に検出した。南側の一部が調査区外のた

め全体の4分の1を調査した。規模、主軸方位は不明で、平面形は方形を呈す。検出面から床面までの掘り込みは57cmで、やや緩やかである。床面は軟弱で、主柱穴と思われるピットが2基確認されている。

遺物（挿図8・10）甕・高杯（杯部）・ミニチュア土器・石鏡

時期 遺物より弥生時代後期終末と考えられる。

③8号住居址（SB08）（挿図6 図版2・10・11）

遺構 平成15年度調査で確認した遺構であり、CV-11を中心に検出した。東側の一部が調査区外であり、北側で9号住居址に切られるため全体の4分の1を調査した。規模は不明で、平面形は方形を呈す。主軸方位はN27°Eである。検出面から床面までの掘り込みは29cmで、ほぼ垂直である。床面は堅固で、部分的に貼床がみられ、主柱穴と思われるピットが2基確認されている。炉址は中央より北側に寄った場所に底部を欠いた甕を埋めた土器埋設炉が設けられていた。

遺物（挿図8・9・10）甕（埋設炉）・壺・高杯（脚部）打製石斧・横刃形石器・磨石

時期 遺物より弥生時代後期終末と考えられる。

④10号住居址（SB10）（挿図6 図版3）

遺構 平成15年度調査で確認した遺構であり、CS-07を中心に検出した。東側の一部がSD16に切られ、南側の一部が調査区外のため全体の4分の1を調査した。規模は不明で、平面形は隅丸方形を呈す。主軸方位は不明である。検出面から床面までの掘り込みは25cmで、ほぼ垂直である。ピットが西壁際に3基、中央部北寄りに1基確認されている。

遺物（挿図9）甕（底部）

時期 遺物より弥生時代後期と考えられる。

⑤9号住居址（SB09）（挿図6 図版3・11・12）

遺構 平成15年度・16年度調査で確認した遺構であり、CW-11を中心に検出した。東側の一部が調査区外のため全体の3分の1を調査した。南側で8号住居址を切る。南側の一部を平成15年度に、北側の一部を16年度に調査した。規模は不明で、平面形は方形を呈す。主軸方位は不明である。検出面から床面までの掘り込みは33cmで、ほぼ垂直である。床面は堅固で、主柱穴と思われるピットが1基確認されている。床面には部分的に焼土がみられる。

遺物（挿図9）甕（ハケ甕）・有段口縁壺・小型丸底土器

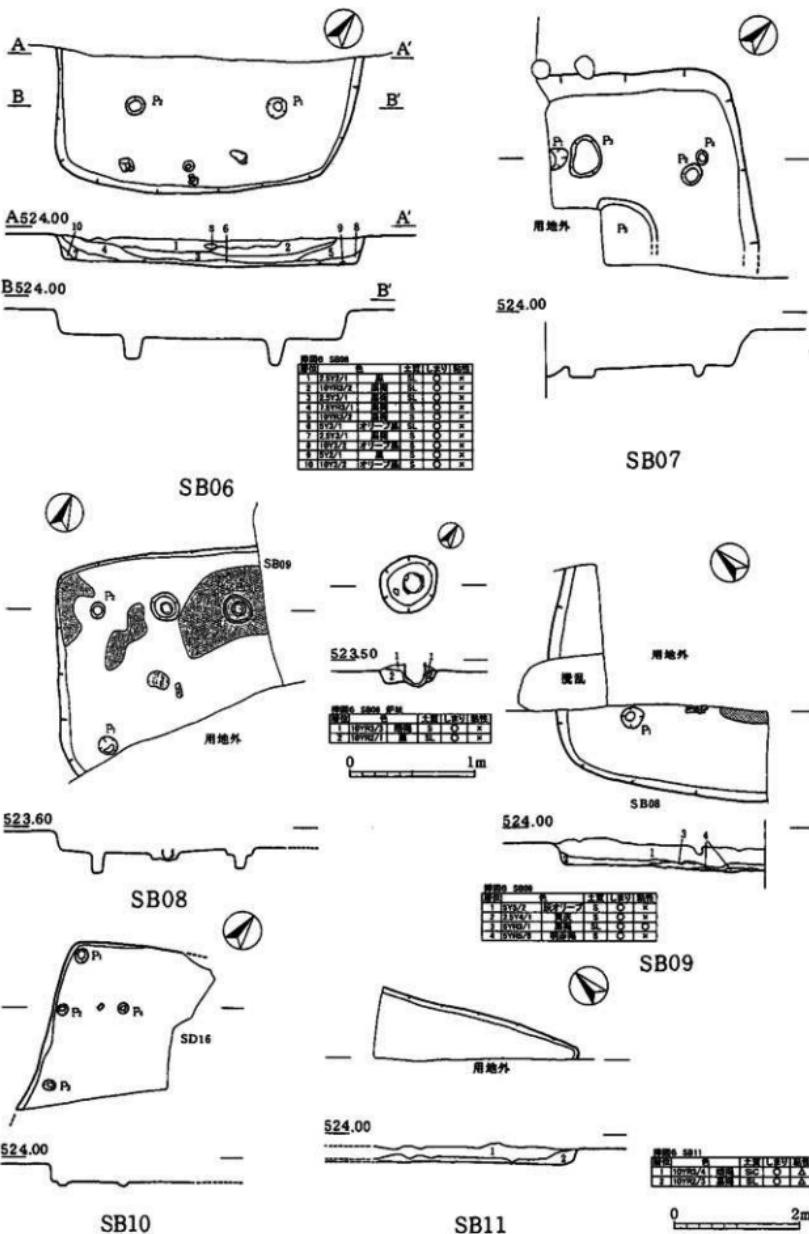
時期 遺物より古墳時代前期末と考えられる。

⑥11号住居址（SB11）（挿図7 図版4）

遺構 平成16年度調査で確認した遺構であり、CY-08を中心に検出した。一部を検出したのみで、ほとんどが調査区外となる。規模、主軸方位は不明で、平面形は隅丸方形を呈す。検出面から床面までの掘り込みは25cmで、ほぼ垂直である。

遺物 小型丸底土器

時期 遺物より古墳時代前期末と考えられる。



插図 6 SB06, 07, 08, 09, 10, 11

(2) 溝址

①溝址16 (SD16) (挿図7 図版4)

遺構 平成15年度調査で確認した遺構であり、CT-08を中心に検出した。部分的な検出であるが、南北方向に延び、最大幅約3m、深さ約40cmを測る。

遺物 (挿図10) 土器片 (弥生時代後期)・天目茶碗

時期 弥生時代後期以降

②溝址17 (SD17) (挿図7 図版4)

遺構 平成15年度調査で確認した遺構であり、CU-09を中心に検出した。南北方向に延び、全長2.5m、幅約60cm、深さ7cmを測る。

遺物 (挿図10) 土器片 (弥生時代後期)

時期 不明

(3) 土坑

①土坑22 (SK22) (挿図7 図版5)

遺構 平成15年度調査で確認した遺構であり、CV-08を中心に検出した。平面プランは円形で、長軸96cm、短軸96cm、深さ12cmを測る。

遺物 なし

時期 不明

②土坑23 (SK23) (挿図7 図版5)

遺構 平成15年度調査で確認した遺構であり、CV-09を中心に検出した。平面プランは不定形で、長軸136cm、短軸100cm、深さ40cmを測る。

遺物 土器片少量

時期 不明

③土坑24 (SK24) (挿図7 図版5)

遺構 平成15年度調査で確認した遺構であり、CT-09を中心に検出した。平面プランは梢円形で、長軸88cm、短軸64cm、深さ24cmを測る。

遺物 土器片少量

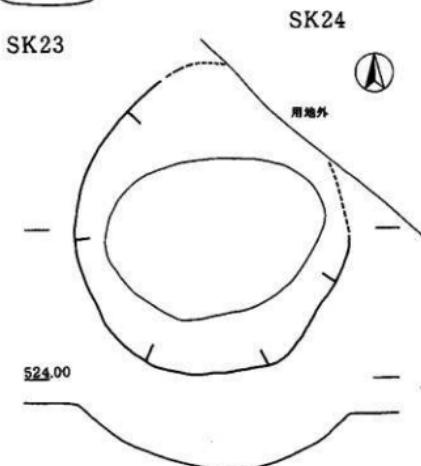
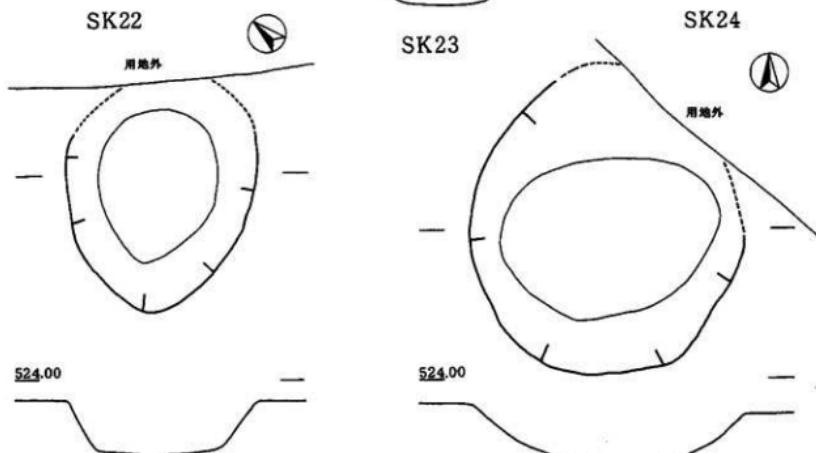
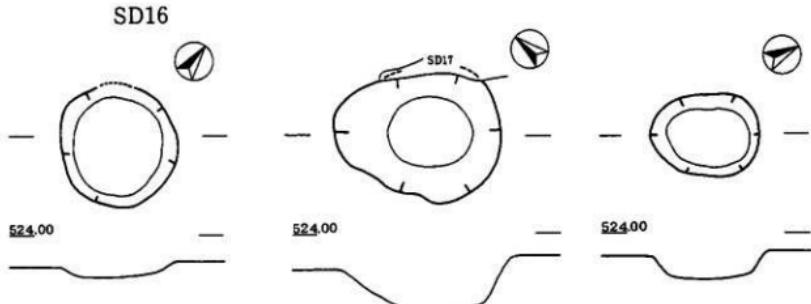
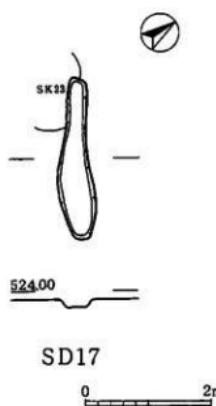
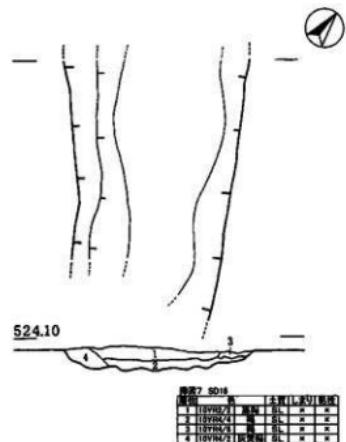
時期 不明

④土坑25 (SK25) (挿図7 図版6)

遺構 平成16年度調査で確認した遺構であり、CX-10を中心に検出した。平面プランは梢円形で、長軸160cm、短軸152cm、深さ44cmを測る。

遺物 なし

時期 不明



挿図 7 SD16, 17・SK22, 23, 24, 25, 26

⑤土坑26（SK26）（挿図7 図版6）

遺構 平成16年度調査で確認した遺構であり、CY-09を中心に検出した。平面プランは梢円形で、長軸216cm、短軸188cm、深さ52cmを測る。

遺物 なし

時期 不明

第2節 試掘・立会調査

（1）3-3-4号線試掘調査（挿図1-①）

北側でおよそ搅乱120cm、黒色土40cm、褐色土30cm以下、弥生時代以降の検出面といわれる灰褐色砂礫層となる。円悟沢川に近づくにつれて、黒色土の上部に洪水起源の黄褐色砂が堆積する。遺構遺物確認されなかった。

（2）6-2号線試掘調査（挿図1-②）

北側では、造成土20cm、黒色土40cm、黒褐色土40cmで灰色砂となり、源長川の流路とみられる。中央では造成土約40cm、灰色粘質土60cm、漆黒粘質土30cm、灰黒褐色粘質土50cm、黒色粘質土20cm、灰色粘質土30cm、灰黄色粘土の順に堆積する。湿地である。

南側では、造成土20cm、黒色土30cm、黒褐色土50cm、黒色土20cm、灰黄褐色粘質土40cmで地山とみられる砂礫層となる。いずれのトレンチでも遺構・遺物は確認されなかった。

（3）3-6-38号線試掘調査（挿図1-⑤）

6-6号線発掘調査（挿図1-④）の西側である。中世とみられる小穴が確認されたのみである。

6-6号線発掘調査で確認された集落は、試掘調査の個所まで広がっていないことを確認した。

（4）6-21号線立会調査（挿図1-⑥）

表土20cm、黒色砂土層50cmまで掘削したが、地山まで達せず、遺構遺物は確認されなかった。

（5）1号公園試掘調査（挿図1-⑦）

造成土30cm、旧耕土20cm、旧水田層20cmで遺構検出面とみられる黄褐色砂土となる。近代とみられる水田による削平が著しく、遺構遺物は確認されなかった。

第4節 まとめ

(1) 弥生時代

該期の遺構は、竪穴住居址4軒（6号・7号・8号・10号）が調査された。

住居址の時期は、出土遺物より弥生時代後期と推定されるが、10号住居址を除いてハケ壺と思われる破片資料を含んでいる点、壺・壺の形状より後期終末と考えられる。また、各住居址の立地している間隔から見て数時期の変遷が予想される。

当遺跡内では、過去に今調査区より西側の地点で竪穴住居址1軒（後期前半）、方形周溝墓9基が調査されており、散在的な集落の存在と墓域の存在が確認されている。しかし、竪穴住居址については、場所による土質状況の特殊性により把握が困難である点を考えると、実際にはさらに多くの住居址が存在する可能性が指摘されていた（飯田市教委 2003）。今回の調査で確認された竪穴住居址はやや新相を示す時期のものであるが、数時期の変遷が見てとれることから短期間ながら集落が存在していたことを示す遺構であり、遺跡内において幾つかの集落が継続して存在した可能性を示すものといえる。また、この集落に対する墓域については、過去の調査事例から考えて集落域周辺に存在する可能性が想定される。

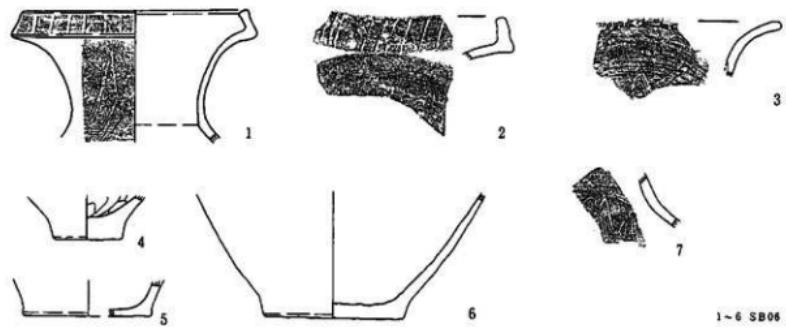
(2) 古墳時代

該期の遺構は、竪穴住居址2軒（9号・11号）が調査された。

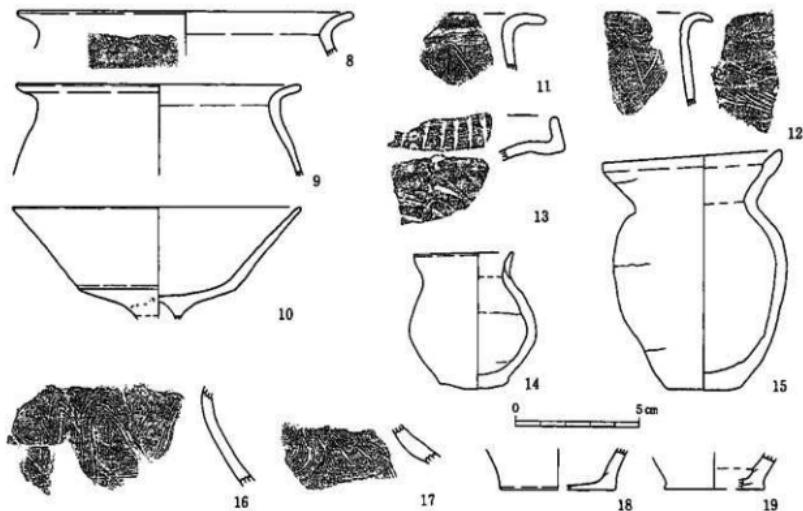
9号住居址からは有段口縁壺の口縁部、小型丸底土器等が出土しており、時期的には前期末と考えられる。また、11号住居址も部分的な調査ではあるが、小型丸底土器の底部等が出土しており、周辺部からも前期の様相を示す遺物の出土が見られることから同様の時期が想定される。

遺跡内からはこれまで該期の遺構が確認されておらず、古墳時代前期の集落の存在は遺跡の性格を考えるうえで大きな意味を持つものといえる。市内におけるこの時期の集落は、座光寺地区に位置する恒川遺跡群をはじめとして数遺跡でみられるが、これらの大半は前段階から継続した集落であり、弥生時代後期終末にみられた集落の大半が廃絶するなか、少数の集落が規模を縮小させながら続いたことを示している（山下 2003）。羽場曙遺跡では、前述したとおり弥生時代後期終末の集落が確認されているが、古墳時代前期の集落との間に数時期の空白期間が想定される。今回の調査区が限られた範囲のものであるため、全容を示しておらず、継続して存在するのかどうかは、今後において、調査区周辺の様相が明らかになった段階で再度検討していく必要があるといえる。

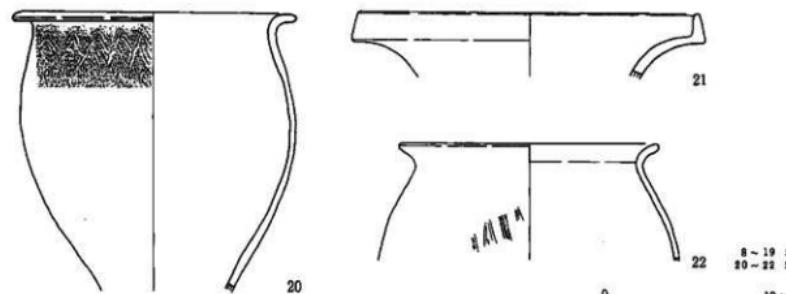
今回の調査では、市内における調査で類例が少ない古墳時代前期の竪穴住居址を確認したことが特筆される。この時期は弥生時代後期終末から集落が激減する時期で、大きな画期がみられる時代である。（山下 2003）この変革期と、中期に見られる集落数の増加には、古墳の築造開始、在地勢力と新たな技術を持つ勢力との関係等の様相が見てとれ、当地域における大きな時代の変革期の一つである。今回の調査ではその全容を明らかにするまでに至らなかったが、今後の調査事例の増加をふまえてさらに考えていかなければならない重要な課題であるといえる。



1~6 SB06



0 5 cm

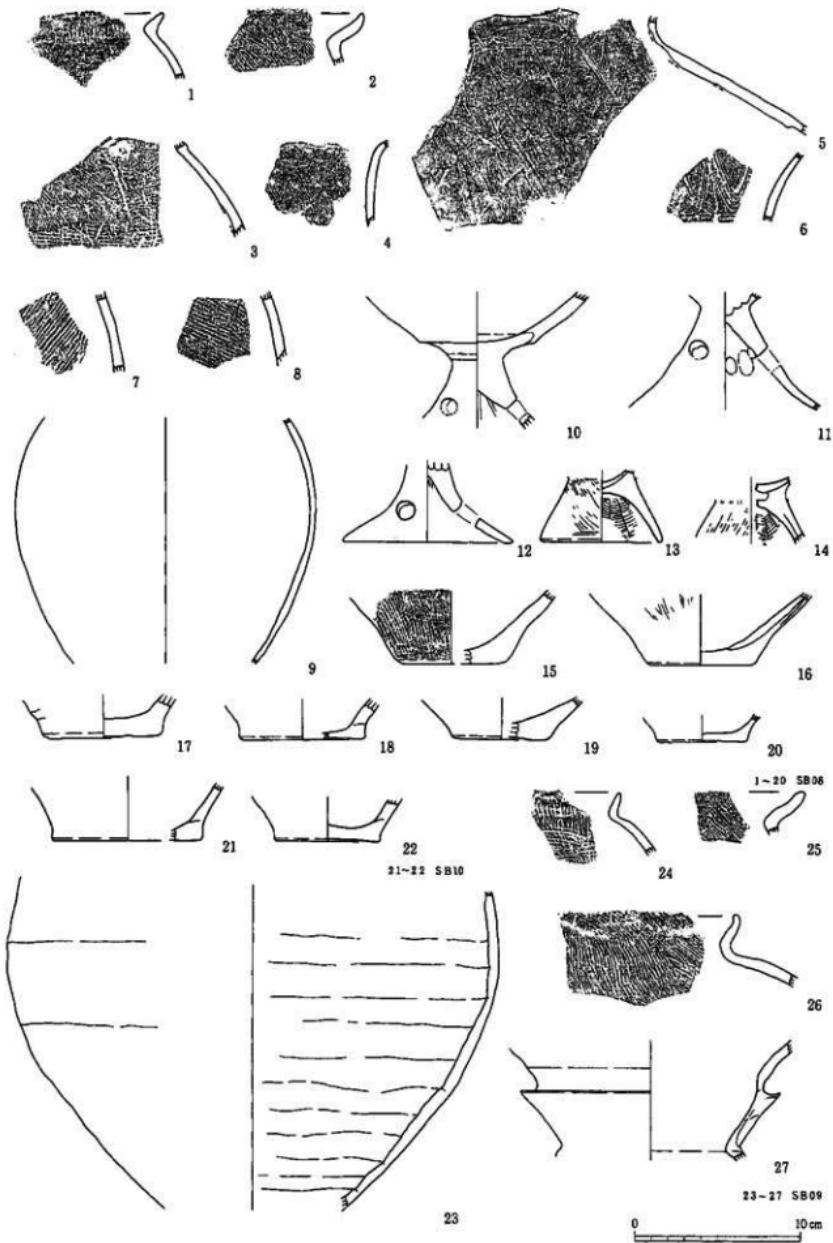


8~19 SB07

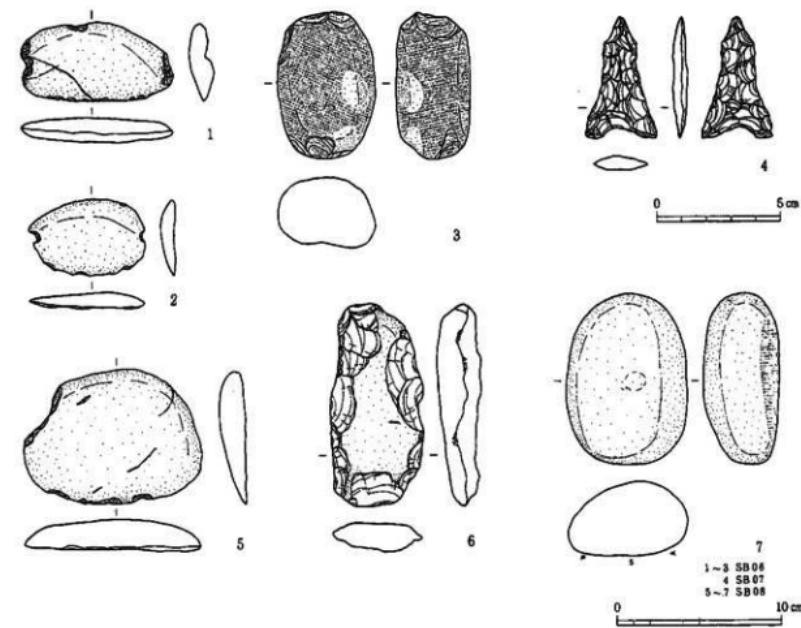
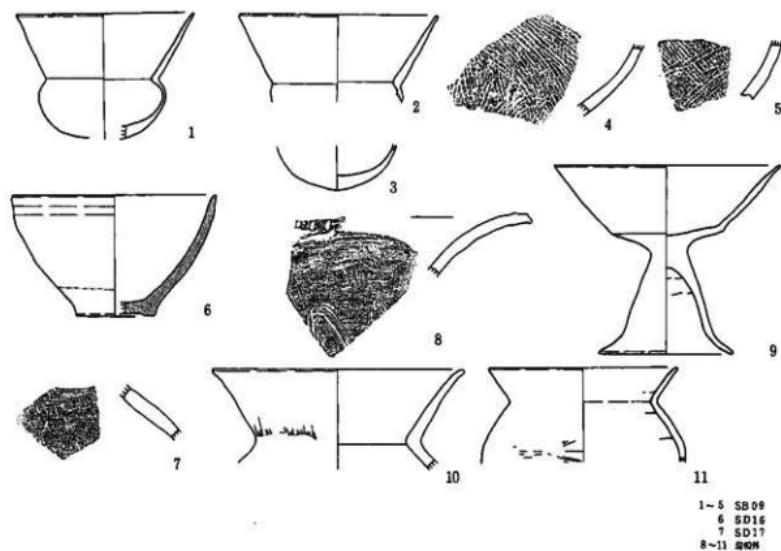
20~22 SB08

0 10 cm

挿図 8 羽場曠遺跡出土遺物（1）



挿図9 羽場曙遺跡出土遺物（2）



挿図10 羽場曙遺跡出土遺物（3）

第4章 方角東遺跡

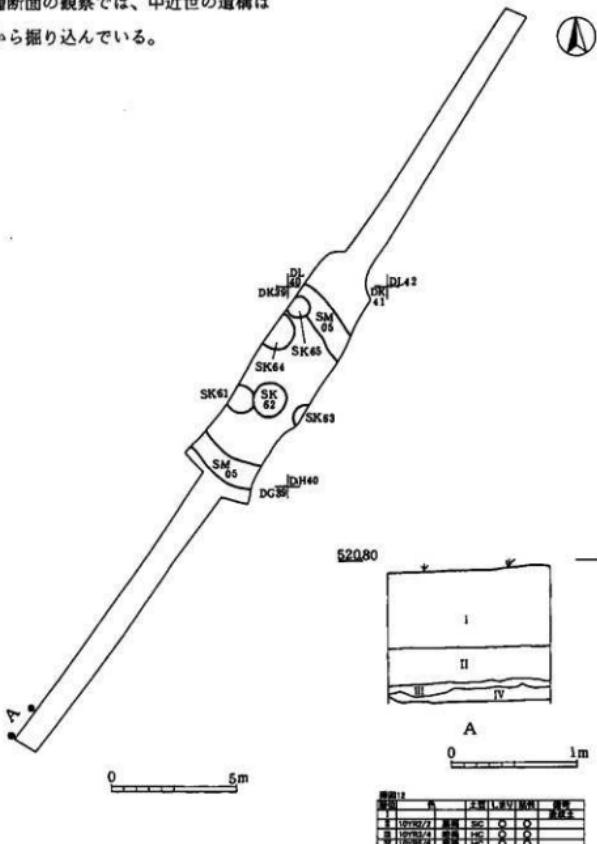
第1節 5-1号線 (HGH558) (挿図1-②、挿図11)

第1項 調査区の設定

飯田市羽場町4丁目558番地、調査前は主に農地であった。調査は55m²を実施した。本調査の位置は、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図による区画、V-Lc74 22-13に位置する。

第2項 基本層序 (挿図12)

検出作業は地山のローム(IV)層で行なったが、土層断面の観察では、中近世の遺構はII層上面から掘り込んでいる。



挿図11 HGH558 遺構分布図

挿図12 基本層序

第3項 遺構・遺物

(1) 方形周溝墓（挿図13 図版13）

①方形周溝墓05（SM05）

遺構 DI-40を中心に位置する。中世とみられる土坑5基に切られる。周溝の2辺を確認したのみで、全体の形状は不明である。周溝内法は $4.2 \times (-)$ m、周溝外法は $7.6 \times (-)$ m、主軸は不明であるが、確認された2辺の傾きはN42°Wを示す。墳丘および埋葬施設は不明である。

遺物 土器片少量

時期 弥生時代後期と考えられる。

(2) 土坑

①土坑61（SK61）（挿図13）

遺構 DI-39に位置し、一部区外のため未調査である。方形周溝墓05を切り、土坑62号に切られる。 $102 \times (84)$ cm、深さ22cmを測る。

遺物 なし。

時期 形態と周辺の類例から中近世のものとみられる。

②土坑62（SK62）（挿図13）

遺構 DI-39に位置し、方形周溝墓05と土坑61を切る。 132×128 cmの円形を呈し、深さ34cmを測る。

遺物 なし。

時期 中近世のものとみられる。

③土坑63（SK63）（挿図13）

遺構 DI-40に位置し、半分以上は調査区外、方形周溝墓05を切る。 $94 \times (36)$ cm、深さ40cmを測る。

遺物 なし。

時期 中近世のものとみられる。

④土坑64（SK64）（挿図13 図版14）

遺構 DK-39に位置し、およそ半分は区外のため未調査である。方形周溝墓05を切る。 $142 \times (86)$ cm、深さ46cmを測る。

遺物 なし。

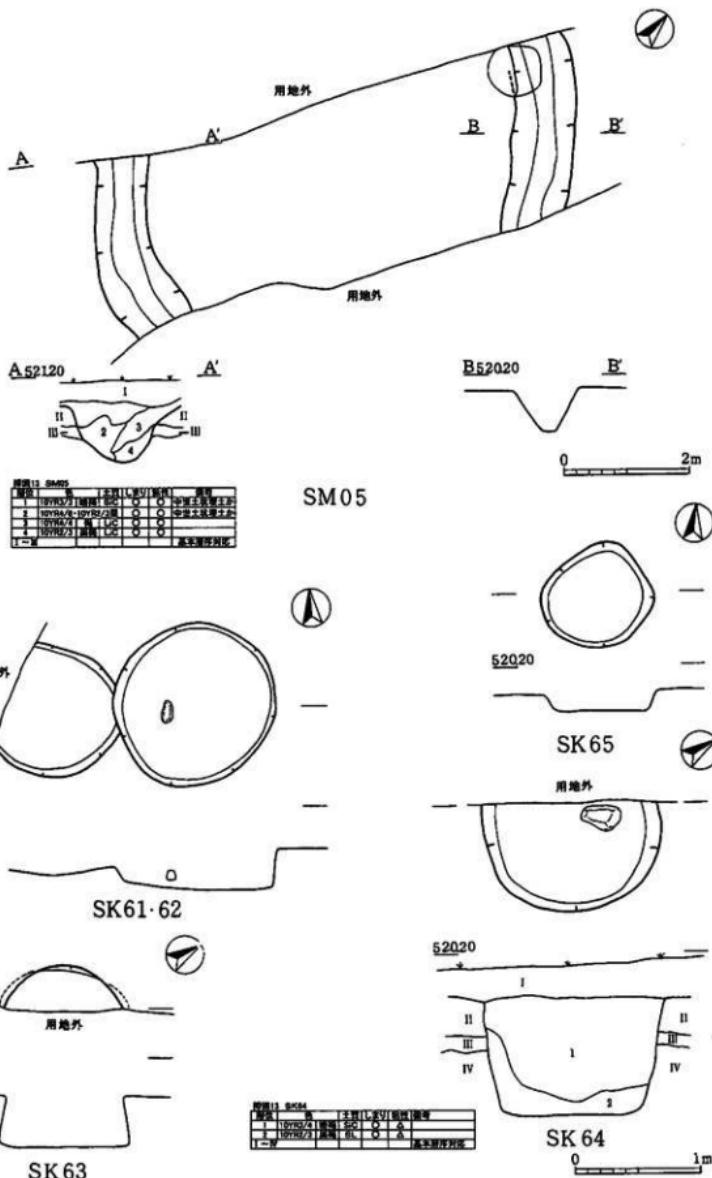
時期 中近世のものとみられる。

⑤土坑65（SK65）（挿図13 図版14）

遺構 DK-40に位置し、方形周溝墓05を切る。 90×86 cmの不整形、深さ18cmを測る。

遺物 なし。

時期 中近世のものとみられる。



挿図13 SM05・SK61, 62, 63, 64, 65

第2節 羽場公園 (HGH760)

(挿図1-⑬・⑭、14)

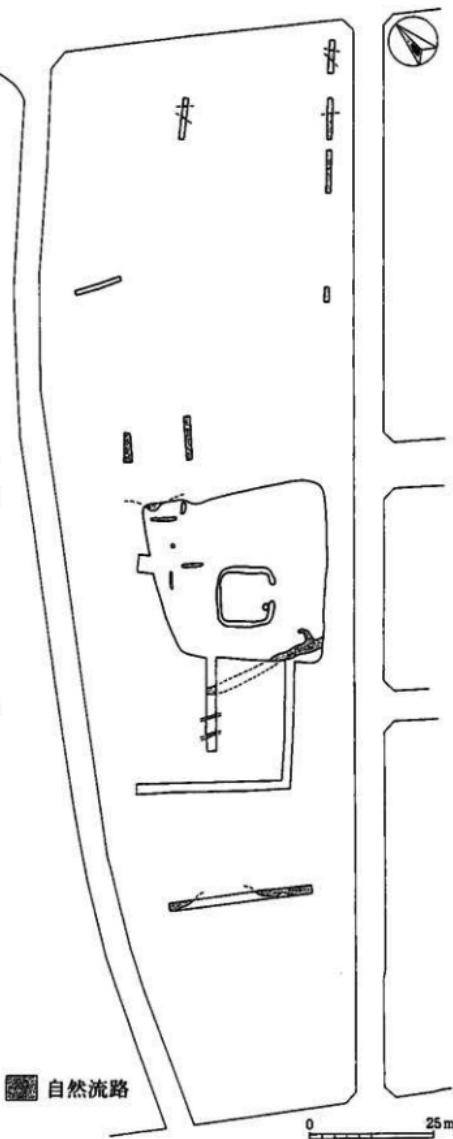
第1項 調査区の設定

調査地は飯田市羽場町3丁目760番地他、調査前は主に宅地であった。本調査は980m²を実施した。本調査の位置は、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図による区画、VII-Lc74 17-26およびVII-Lc74 17-27に位置する。

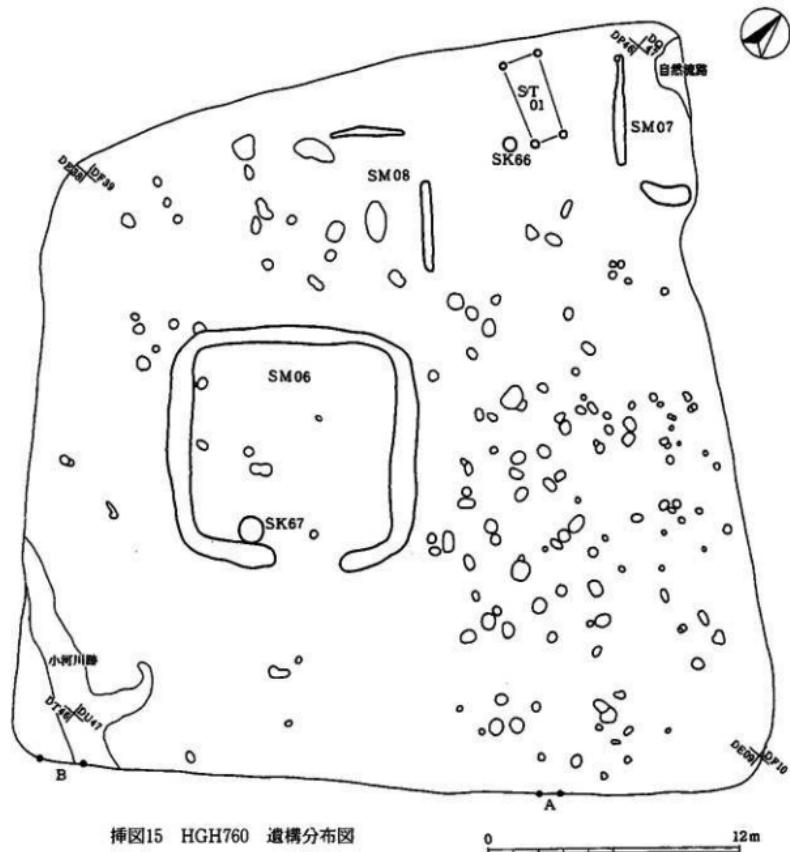
第2項 基本層序 (挿図14・16)

VII層は、当遺跡周辺で確認されている縄文時代晚期から弥生時代にかけての洪水砂とみられる。造構はVI層から掘り込まれていたが、VI層上面での造構の把握は困難であったため、VII層上面で検出した。またVII層より上層にも自然流路があり、弥生時代以降も洪水に見舞われていたとみられる。

調査箇所は、平坦に造成されていた個所である。もともとは南東側に緩やかに傾斜していたが、造成のため北側では削平されており、堆積が浅い。試掘調査後に本調査を実施していない個所は、大小の河道等が分布し造構の分布が希薄な場所であり、湿地化していくものとみられる。

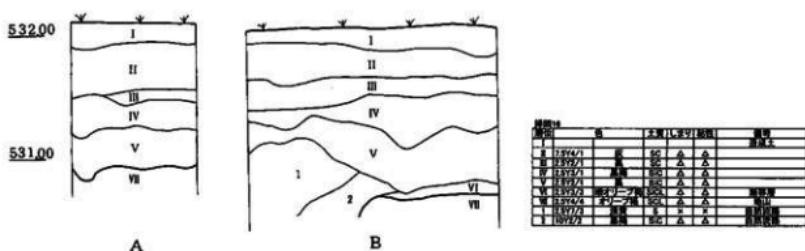


挿図14 HGH760 トレンチ位置図



挿図15 HGH760 遺構分布図

0 12m



挿図16 基本層序

0 1m

第3項 遺構・遺物

(1) 方形周溝墓

①方形周溝墓06 (SM06) (挿図17 図版16)

遺構 DD-42を中心位置する。周溝内法は9.7×9.5m、周溝外法は11.9×11.5m、主軸はN40° Wを示す。内法面積は約92m²である。遺構検出面までは慎重に注意しながら掘り下げたが、墳丘および埋葬施設は確認されなかった。ほぼ正方形を呈し、南西側に陸橋を設ける。周溝は、4辺の直線部で幅が広くて深く、四隅で狭くて浅い。

遺物 周溝内より横刃形石器が1点と、弥生土器碎片が出土している。

時期 弥生時代後期と考えられる。

②方形周溝墓07 (SM07) (挿図18 図版16)

遺構 ほぼ直交する2条の溝を確認し、方形周溝墓06との位置関係や軸方向から方形周溝墓と判断した。DP-47を中心に位置し、北東側は調査区外のため未調査である。中央部を自然流路が流れており、隣接地の試掘調査でも自然流路が確認されている。中央から東側は、自然流路により失われている可能性が高い。さらに全体的に削平されているものとみられ、溝は貧弱で、隅は途切れている。墳丘、主体部ともに確認されず、2辺の周溝を確認したのみである。南東側の溝の東側は、陸橋である可能性がある。規模は、周溝内法は(6.1) × (3.1)m、周溝外法は(7.1) × (3.3)m、主軸はN43° Wを示す。

遺物 なし

時期 方形周溝墓06との関係からして、弥生時代後期と考えられる。

③方形周溝墓08 (SM08) (挿図18 図版16)

遺構 方形周溝墓07と同様、直交する2条の溝を、方形周溝墓06との位置関係、軸方向から方形周溝墓と判断した。DJ-44を中心に位置する。周溝内法は(6.5) × (4.3)m、周溝外法は(6.9) × (4.8)mを測る。陸橋、墳丘、主体部は確認されず、形態等は不明である。そのため主軸方向は不明であるが、長い方の溝はN42° Wを示す

遺物 なし

時期 方形周溝墓06との関係からして、弥生時代後期と考えられる。

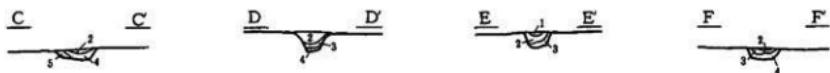
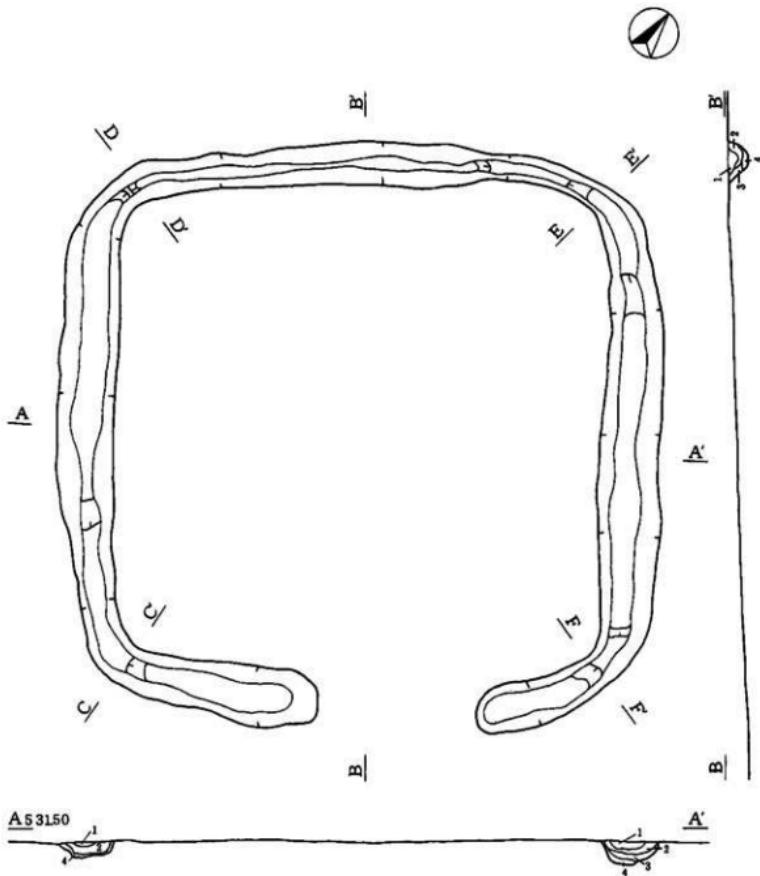
(2) 挖立柱建物址 (挿図18 図版17)

①挖立柱建物址01 (ST01)

遺構 DN-46を中心に位置する。1間×1間、桁方向はN60° Wを示す。桁行は4.0m、梁行は1.8mを測る。建物面積は7.2m²である。埋土は黒色で軟らかく、締まりがない。

遺物 なし

時期 中近世とみられる。



1	10500/1	2	3	4
2	10500/2	3	4	5
3	10500/21	4	5	6
4	10500/22	5	6	7
5	10500/23	6	7	8
6	10500/24	7	8	9
7	10500/25	8	9	10

0 3m

挿図17 SM06

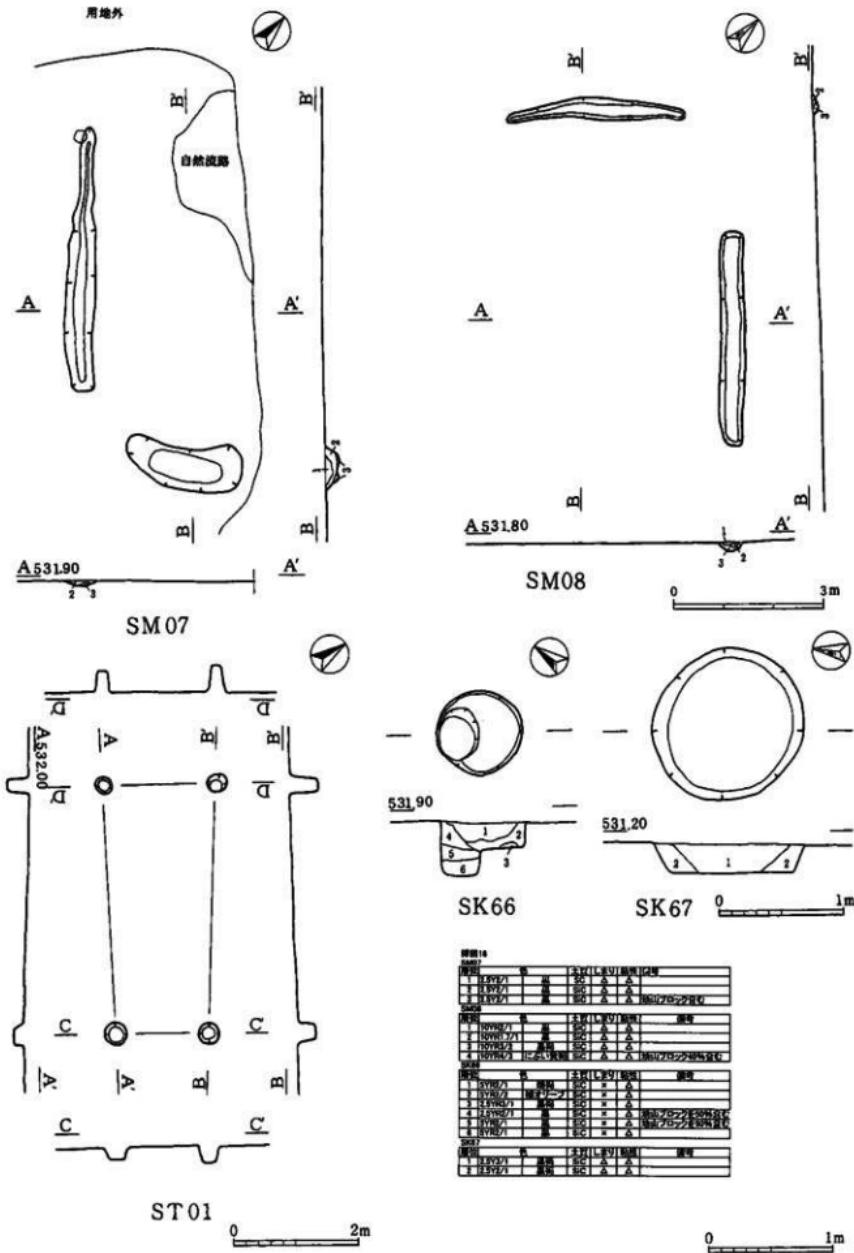


図18 SM07, 08・ST01・SK66, 67

(3) 土坑 (挿図18 図版17)

①土坑66 (SK66)

遺構 DM-46に位置する。68cmの円形を呈し、深さ43cmを測る。北西側が一段深くなっている。

遺物 灰釉陶器

時期 埋土は、掘立柱建物址01のそれと類似しており、出土遺物は混入と考えられる。平安時代前半（9世紀）以降のものと考えられる。

②土坑67 (SK67)

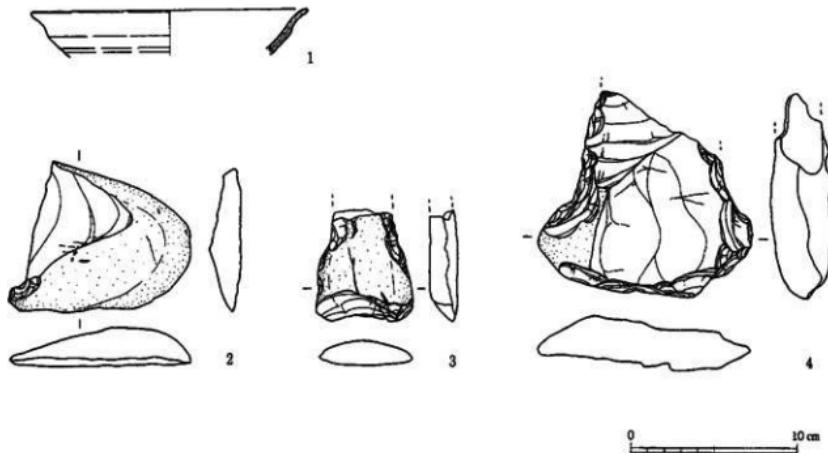
遺構 DB-47に位置する。方形周溝墓06と重複するが先後関係は不明である。122×121cmの円形を呈し、深さ23cmを測る。埋土は土坑66よりも締まっており硬く、古相を呈す。

遺物 なし

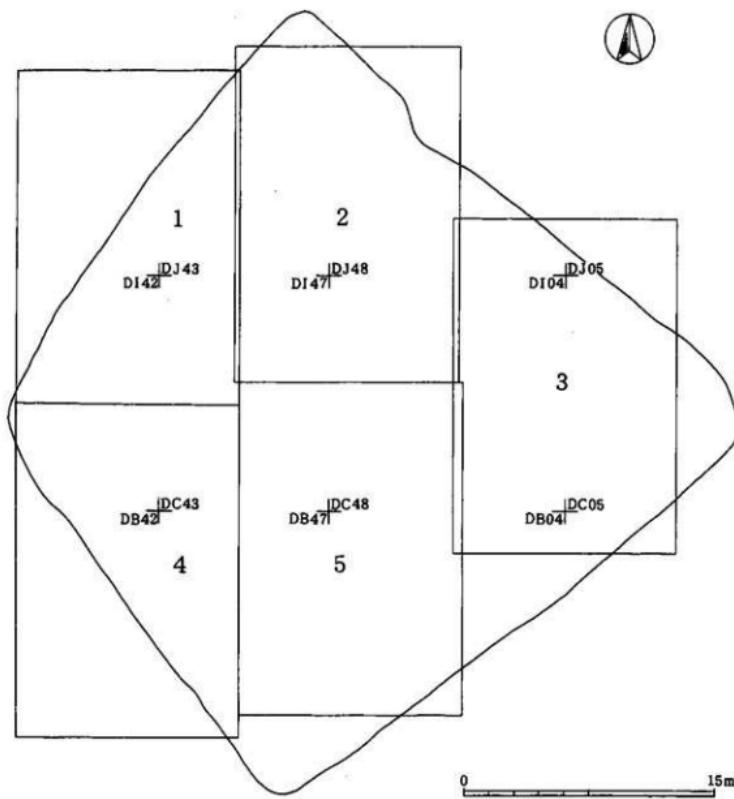
時期 不明

(4) 遺物 (挿図19)

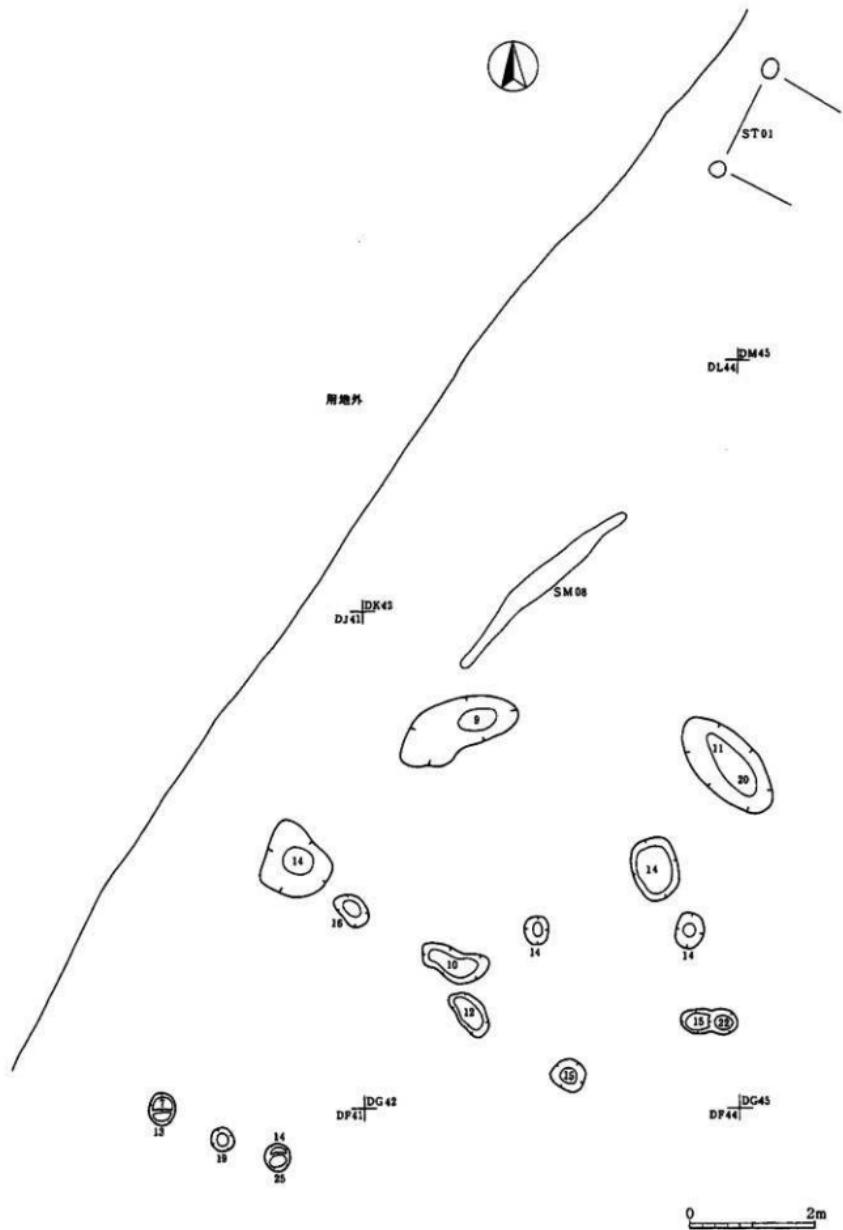
1は土坑66から出土した灰釉陶器の口縁部である。混入品とみられ、9世紀の製造とみられる。2は方形周溝墓06の周溝より出土した横刃型石器である。縄文または弥生時代とみられ、遺構に伴うかは不明。硬砂岩製。3は縄文時代のものとみられる打製石斧である。基部を欠損している。硬砂岩製。4は、弥生時代のものとみられる有肩扁状形石器である。同じく、基部を欠損しており、全体的にかなりローリングを受けている。緑色岩製。3、4は遺構外出土である。



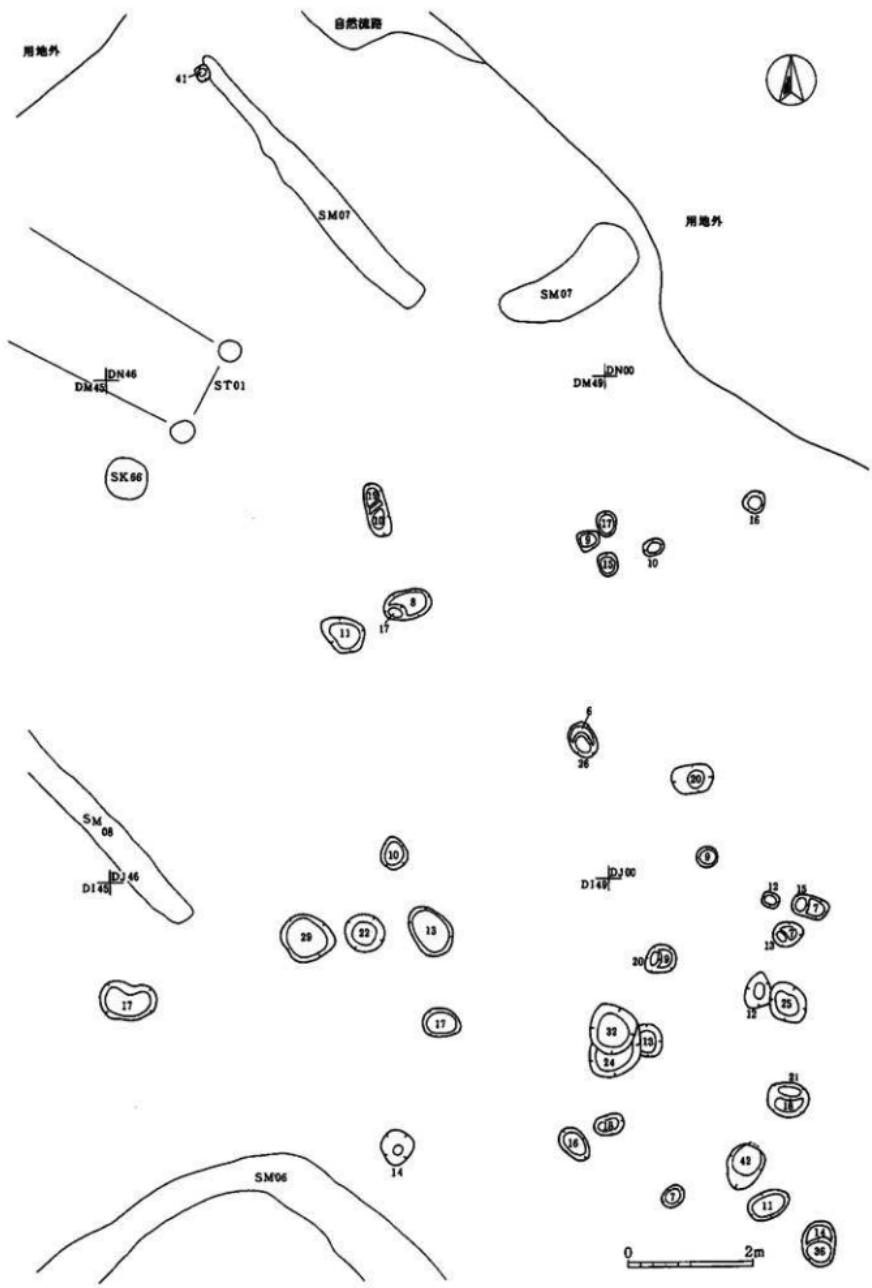
挿図19 HGH760 出土遺物



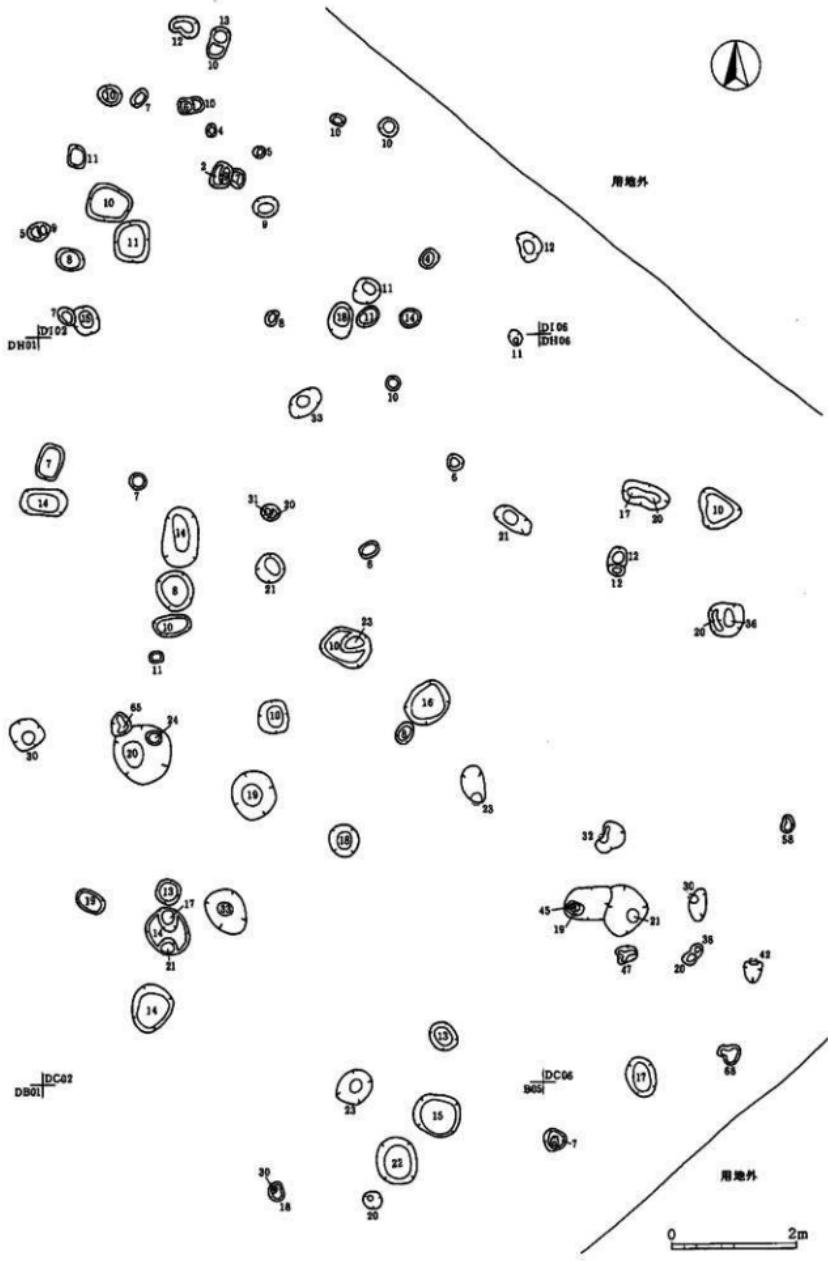
挿図20 HGH760 小穴割付図



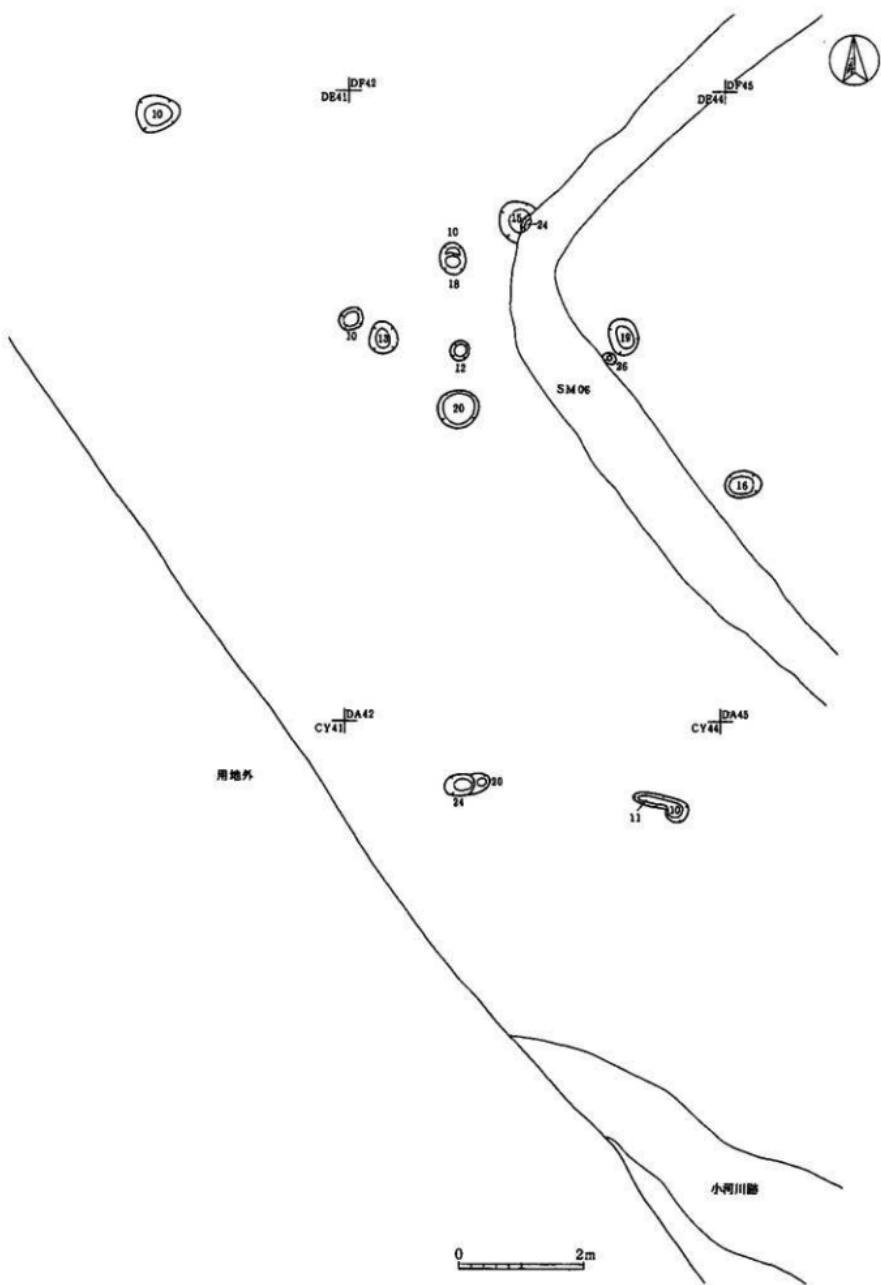
挿図21 HGH760 割付図(1)



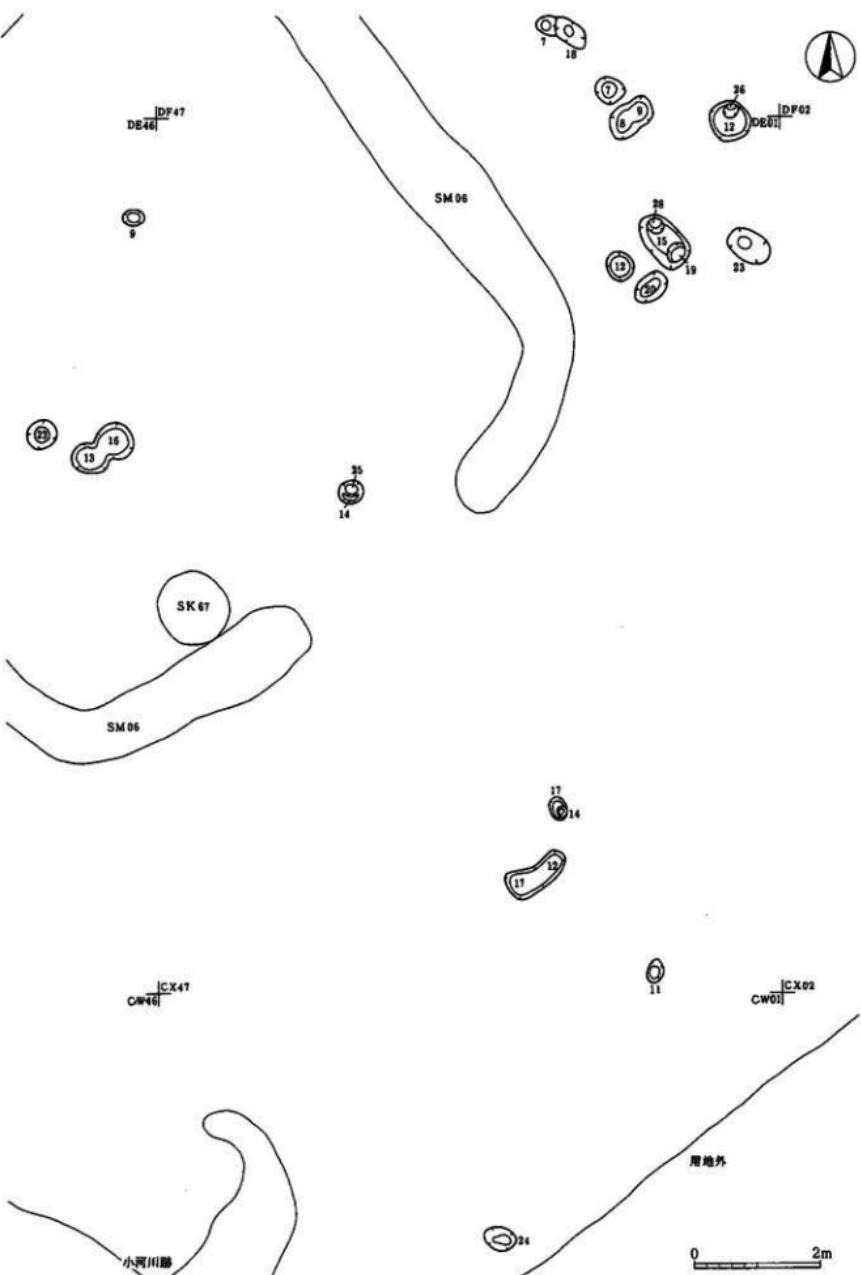
挿図22 HGH760 割付図(2)



挿図23 HGH760 割付図 (3)



挿図24 HGH760 割付図(4)



摺図25 HGH760 割付図（5）

第3節 試掘・立会調査

(1) 6-33号線試掘調査（挿図1-⑧）

北側トレンチでは、表土30cm、暗灰褐色砂質土60cm、暗褐色砂質土40cm、黒色土40cmの順に堆積し、以下洪水起源の砂と黒色土の互層となる。遺構は確認されなかったが、洪水起源の砂層から縄文土器片、弥生土器片が僅かに出土した。土器片は摩滅している。

南側トレンチでは、耕土20cm、褐色砂質土20cm、暗褐色砂質土30cm、黒色土50cm、褐色土30cm、黒褐色土30cmで地山のローム層に至る。遺構は確認されなかったが、トレンチの南側で洪水起源の砂が褐色土上部に観察された。弥生時代の土器片が黒褐色土より出土したが、流れ込みである。

集落外の生産域と判断され、本調査は実施しなかった。

(2) 6-32号線試掘調査（挿図1-⑨）

地表下約140cmで地山の二次堆積ロームとなる。遺構・遺物は確認されなかった。

(3) 5-2-2号線試掘調査（挿図1-⑩）

西側では表土下約80cm、東側では約60cmでローム層となる。東側で中世の小穴2基、時期不明の土坑を2基確認した。東側に湿地帯が広がるものとみられる。

(4) 4-10号線立会調査（挿図1-⑪）

耕土約20cm、黄褐色土30~40cmで以下、黄色砂礫層となる。遺構遺物は確認されなかった。

(5) 2号公園試掘調査（挿図1-⑬）

表土50cm、黄色の砂混じりの黒色土20cm、黒色土60cmの順に堆積し、地山とみられる黄褐色砂土になる。円悟沢川の河道と比較的新しいとみられる堅穴が確認されたのみであり、工事は遺構検出面まで達しない。

第4節まとめ

(1) 弥生時代

市道5-1号線で方形周溝墓05が、羽場公園地点で方形周溝墓06~08の合計4基が確認されている。いずれも遺物に恵まれず、詳細な時期は不明であるが弥生時代後期とみられる。調査範囲の限られていた市道5-1号線地点では言及し難いが、羽場公園地点では、方形周溝墓同土の重複ではなく、連続した短期間のうちに築造されたとみられる。本調査区の南北は自然流路が著しく、幅およそ40m前後の極めて狭い微高地に遺構が分布していることも、羽場公園地点の特徴といえよう。

遺跡名は異なるが、隣接する中央自動車道西宮線の権現堂前遺跡では弥生時代後期前半の住居址5軒と方形周溝墓1基、さつみ遺跡では弥生時代後期後半の方形周溝墓1基が確認されている。当遺跡内では、過去の調査により遺跡の北端で方形周溝墓（古墳時代前期～中期か）1基、南端の段丘の縁に近い

個所で弥生時代の方形周溝墓が1基確認されている。これらの墓域に対する居住域は付近に存在するところもあるが、羽場公園周辺には居住域があるものの、市道5-1号線周辺では居住域が確認されておらず、単に未発見なのか、元々離れたところに居住していたのか不明である。羽場署遺跡と同様に、土質状況の特殊性により遺構の把握が困難である点も注意しなければならない。

方形周溝墓についてみてみると、方形周溝墓06は、周溝の直線部の中央が深く、四隅が浅くなっている。乱暴な言い方をすれば、1辺の端ほど掘削が粗雑である。こうした周溝の深浅の状況は、1辺の中央から端へと掘り進んでいった、周溝の掘削単位を示している可能性を言及できる。方形周溝墓07・08は上部を削平されているとみられるが、直線部しか確認できず、隅は溝が途切れてしまっている。方形周溝墓06も上部を削平すれば、方形周溝墓07・08と同様の形態になるとみられる。羽場公園地点での3基の方形周溝墓は、規模こそ違うものの、本来同様の形態であった可能性がある。

また、当遺跡内の方形周溝墓の主軸は、いずれも西に振っている。羽場公園地点の3基は40~43°西に振っており、5-1号線においてもおそらく42°西に振っている。西に振った先には風越山がそびえる。羽場公園地点から風越山山頂は、実際には西偏32°だが、実際に遺構の前に立った感覚では、正面に近い。方形周溝墓が風越山を意識した可能性は、権現堂前遺跡において飯田下伊那で最初に方形周溝墓が発見された際、既に神村透により指摘されている（日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会 1971）。このことを実証するのは困難であるが、古来信仰の山として崇められてきた風越山の歴史を考える上で、興味深い指摘といえる。

(2) 平安時代

羽場公園地点の土坑66から9世紀前半とみられる灰釉陶器片が出土しているのみである。上述したとおり、土坑は中近世の遺構と考えられ、当該期の遺構は確認されていない。羽場公園より北方約200mのさつみ遺跡では、平安時代末期と報告されている堅穴住居址が1軒あるものの、平安時代前半の遺構は調査されていない。当該期に何らかの活動はあったものとみられるが、不明な点が多い。

(3) 中近世

5-1号線地点の土坑は、遺物の出土がないため、詳細な時期は不明である。しかし、重複関係や類例からして、中世から近世にかけての墓壙とみられる。羽場公園地点の土坑66も同時期とみられる。

第5章 総 括

今次調査の結果と各調査地点のまとめは、既に各章で述べたとおりであるが、本章では調査により得られた情報の整理と気付いた点を挙げ、羽場丸山第2地区全体の総括を行なうものとしたい。

(1) 両遺跡が被った災害

区画整理第2地区周辺の、特に西側の一帯では、洪水によるものとみられる黄褐色砂が広く分布しており、今次報告個所でも確認されている（羽場公園においてはⅦ層）。これまでの調査では、同層の前後の遺構・出土遺物から、縄文時代後期後葉以降、弥生時代後期前半の間とされ、さらに伊賀良地区中村中平遺跡の状況も踏まえて、縄文時代晚期以降弥生時代後期前半の間（飯田市教育委員会 2003）とされてきた。今次報告分では、これらに新たな知見を得ることができなかった。

しかし、西側に隣接する砂払遺跡で平成18年度に発掘調査が実施されており、黄褐色砂層を掘り込む土坑から、縄文時代晚期前葉の土器片が出土している（飯田市教育委員会 2008刊行予定）。砂払遺跡の縄文時代晚期前葉の土器片は極めて少量のため、十分とは言い切れない部分もある。しかし、出土遺物を評価すれば、砂払遺跡においては、黄褐色砂層は縄文時代晚期前葉以前ということができる。砂払遺跡と羽場曙・方角東遺跡の位置関係や土層の堆積状況から、黄褐色砂層は同一のものとみられ、羽場曙遺跡・方角東遺跡においても参考となる事象である。今後、類例の増加等に留意する必要がある。

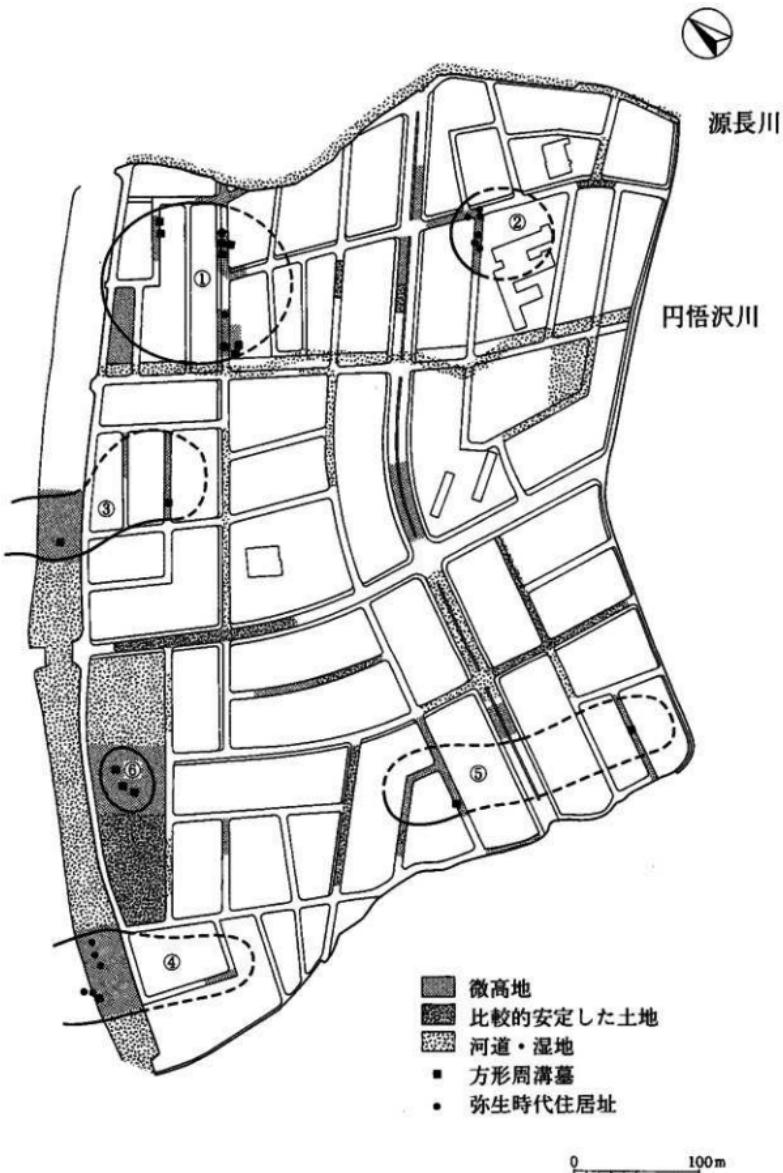
(2) 集落の立地について（挿図26）

羽場丸山地区に限らず市内の地形は微視的に見れば、小河川や湿地と微高地が縞状に繰り返している場所が多く、特に低湿地ではその傾向が顕著である。そして、主に遺構は微高地上に分布する。羽場丸山地区は、いわゆる上段であるが、中央アルプス前衛の山から発達した扇状地の端部に位置し、段丘の縁部を除いて低湿地の様相を呈している。今次報告分の調査により、低湿地の間に縞状に分布する微高地に集落が形成されるというこれまでの状況をさらに裏付ける形となった。

挿図26は、今次報告分に至るまでの区画整理第2地区に関する調査結果と、隣接する中央自動車道西宮線の調査結果を、上述の微高地と小河川跡及び湿地に分けて整理したものである。個々の調査は小規模であるが、比較的広範囲を調査しているため、地区全体の様相がおぼろげながら見てとれる。ただし、一貫した記録ではないため調査者の視点や記録方法が異なることと、源長川・円悟沢川は、自然による河道の移動だけでなく、特に中世以降、河川改修を受けてその流れを変えている可能性があること、さらに遺構の掘り込み面と遺構確認面との相違による遺構把握の問題点等があり注意が必要である。そのため大雑把なあくまでも傾向として捉えていただきたい。

羽場曙遺跡は、源長川と円悟沢川に挟まれ比較的狭い。一筋の微高地が両河川と並行して伸びているが、中央付近で若干湿地化するとみられ、西（①）と東（②）に遺構の分布が分かれている。また方角東遺跡に比して、遺構の分布が濃いことが挙げられる。

方角東遺跡は、円悟沢川から段丘崖までの広範囲である。図化はしていないが、中央自動車道西宮線から3-3-4号線の間は、2つか3つの大きな湿地帯が東西に走るものとみられ、3-3-4号線よ



挿図26 集落の立地

り東側では一筋の湿地帯が東へ走るものとみられる。さつみ遺跡および市道6-14号線地点にかけての一帯(③)と、現在の遺跡名は異なるものの権現堂前遺跡の中央自動車道西宮線地点周辺(④)、市道6-27号線から5-1号線にかけての一帯(⑤)に、比較的多くの遺構が分布する微高地がある。中央自動車道西宮線建設に先立つ発掘調査では、今次調査した羽場公園付近は湿地帯と報告されている(日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会 1970)。実際多くの自然流路が確認され、大半は湿地または流水の影響が強い場所であった。しかし、上述のとおり僅かながら微高地(⑥)が確認され、そこに遺構の分布が把握されたことは大きな成果といえる。そして、⑥の如き小規模な微高地にも遺構が分布することは、現在湿地帯とみられる個所にも同様な遺構分布がある可能性があり、注意が必要である。

(3) 時代毎の集落の様相

次に、前項の①～⑥までの微高地を時代毎に概観してみる。周辺では縄文時代後晩期で有名な権現堂前遺跡がある。しかし、羽場曙・方角東遺跡内では、当該期の遺構は確認されておらず、集落が分布する可能性が指摘できる程度である。

続く弥生時代では、①～⑥の各微高地に後期以降の遺構が分布する。遺構として把握できる集落は、住居址に代表される居住域と、方形周溝墓に代表される墓域に分けられる。居住域と墓域は、①・④の微高地内で並存しているが、それ以外では分かれている。①・④の微高地でも、④の権現堂前遺跡では後期前半の住居址は2群に分けられているが、そのうちの1群と方形周溝墓が一部重複している。土器編年で同一時期でも共存していたかは不明といえる。また、⑥の羽場公園地点は、周辺の状況から墓域だけの微高地として捉えることができる。こうしてみると、ほとんどの個所で居住域と墓域は分けられていたとみられる。遺構として把握はできていないが、微高地間にある湿地は生産域として利用されていたとみられる。

古墳時代は、6-6号線他で調査された②の集落において、前期末の集落が確認されたことが大きな成果と言える。第3章で述べたとおり、前期末の集落跡は、羽場曙遺跡では初めて確認されたものであり、市内でも決して類例が豊富な事ではない。弥生時代終末から古墳時代前半にかけての、飯田下伊那地方の様相を探る上で重要な発見といえる。

続く古墳時代中期から平安時代にかけては、今次報告分では当該期の遺構の発見がなかったため、新たな所見は得られなかった。

中近世は、土坑群の発見があり分布の範囲が広がったことは挙げられる。また弥生時代と中近世の遺構の分布は重複していることも、当地の土地利用を考える上で興味深い。

(3) おわりに

以上のとおり、区画整理第2地区に関する調査の結果、2003年に指摘された当地方の災害史、弥生時代の集落、中位段丘上の開発、中近世の墓制に加えて、災害の時期、遺跡の立地と弥生時代の集落について新知見を得ることができた。低湿地と微高地が交錯する中で、微高地に集落域と墓域を求める、低湿地を生産域として利用したであろう弥生時代の姿が再確認された。羽場曙・方角東の両遺跡は比較的広範囲な集落址であり、特に居住域と墓域、さらに生産域との関係を探る上で重要な遺跡といえる。こ

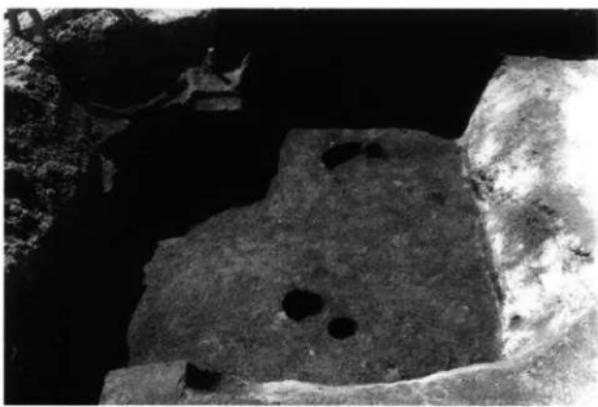
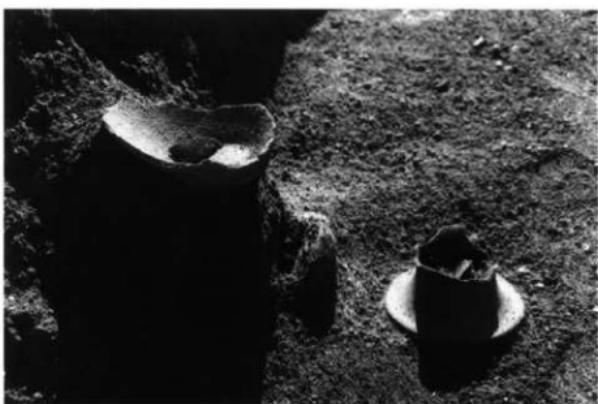
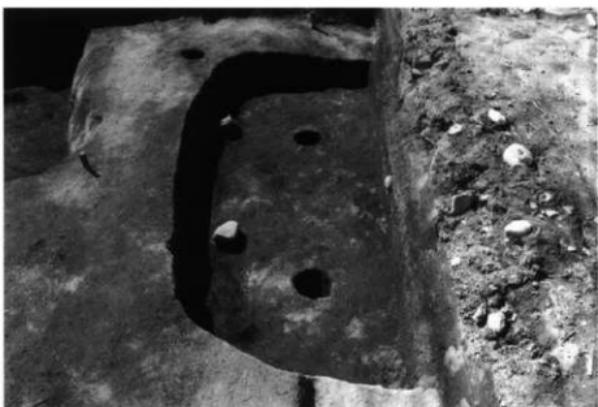
うした集落構造が確認されれば、伊那谷の原始社会を考える上で欠くことのできない成果となろう。担当者の力不足が大きく、遺跡の内容を十分に咀嚼することができなかったことは遺憾である。今後に残された大きな課題といえる。

区画整理という本事業の性格上、面的な発掘調査はほぼ困難で、小規模なトレンチ調査が主体となるなど、制約が大きかった。また、各街路区内の造成や個人の諸開発には個々に対応しているものの、十分とは言い難いのが実情である。区画整理第2地区の事業は、今年度の公園を最後にはぼ終了する。今後、街路区内の個々の事業に対しては、きめ細かな対応を執ることが肝要といえる。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたり蔵文化財の保護に多大なるご理解をいただきました、関係部局には、厚く御礼申し上げます。

《主要参考・引用文献》

- 日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会 1971 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 一 飯田地区一』
- 下伊那地質誌編集委員会 1976 『下伊那の地質解説』
- 上郷史編集委員会 1978 『上郷史』
- 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
- 飯田市教育委員会 1999 『座光寺中島遺跡』
- 長野県飯田市教育委員会 2003 『羽場疊遺跡・方角東遺跡』
- 山下誠一 2003 「飯田盆地における古墳時代前・中期集落の動向 一 発掘された竪穴住居址を基にして一」
- 『飯田市美術博物館研究紀要』第13号
- 長野県飯田市教育委員会 2007 『飯田城跡』



図版2 羽場嗜遺跡



SB08



同所跡



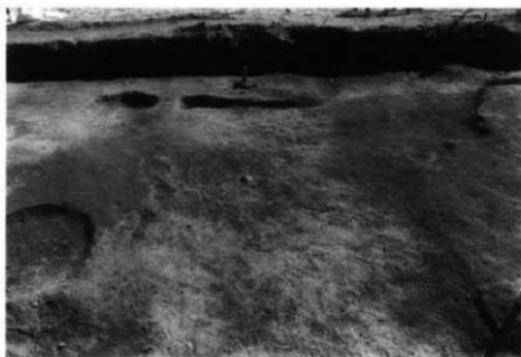
同所跡断面



図版4 羽場曙遺跡



SB11



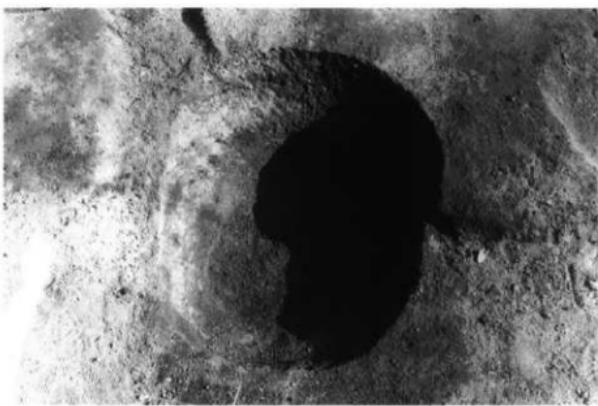
SD16



SD17



SK22

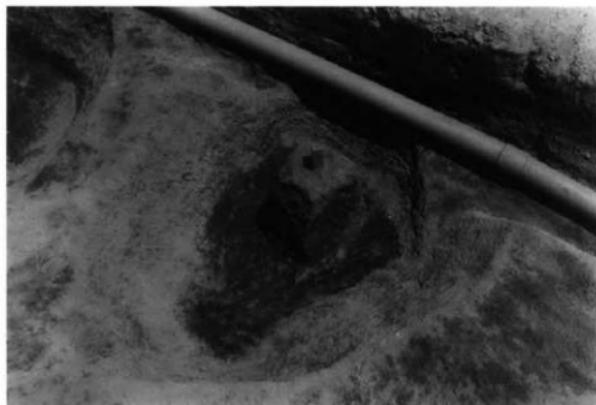


SK23

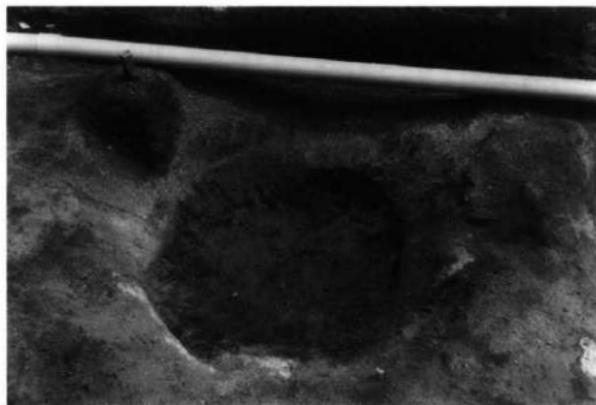


SK24

図版6 羽場嘴遺跡



SK25



SK26



CX09出土高杯

図版7 羽場曙遺跡



午前十時一



調査区全景

図版8 羽場曙遺跡



重機作業風景



作業風景



作業風景

SB06

SB06

SB07

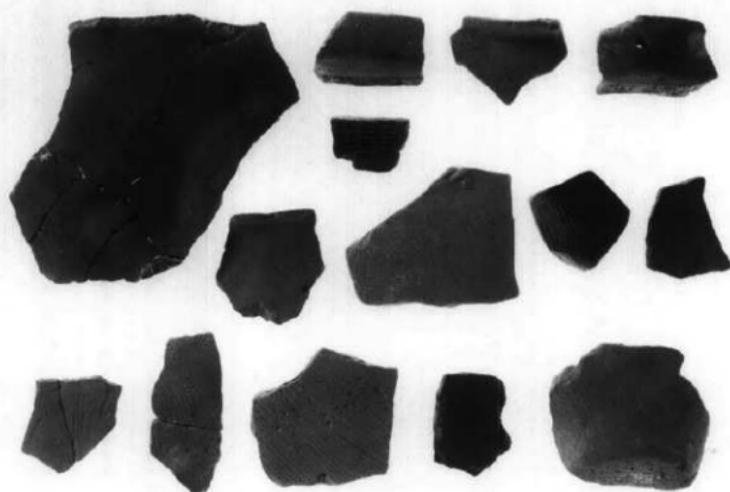


SB07



SB08

SB08

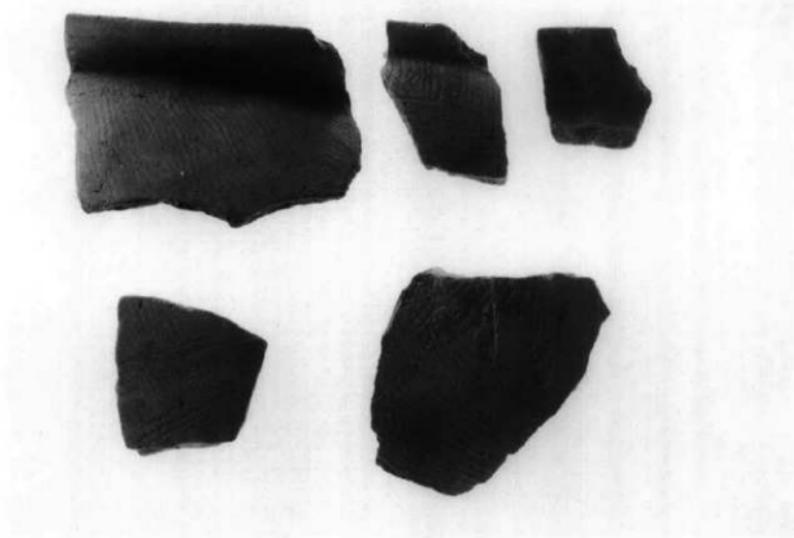


SB08

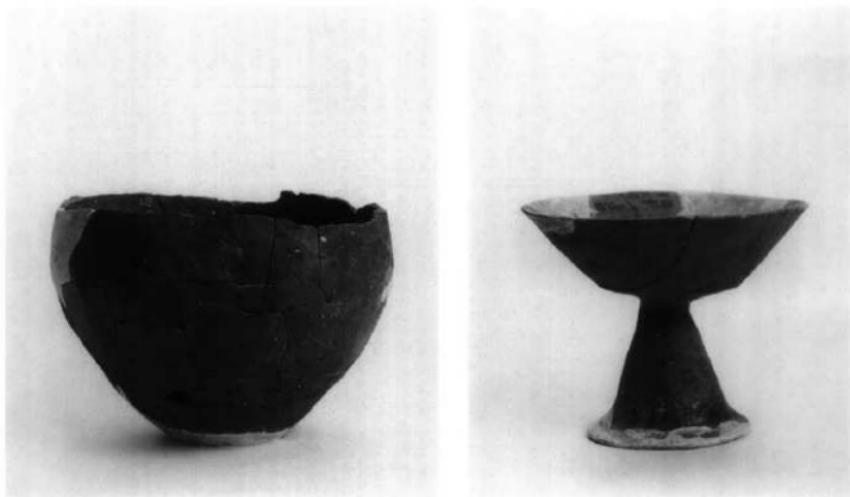


SB09

図版12 羽場曙遺跡



SB09



SB09

CX09



調査区全景

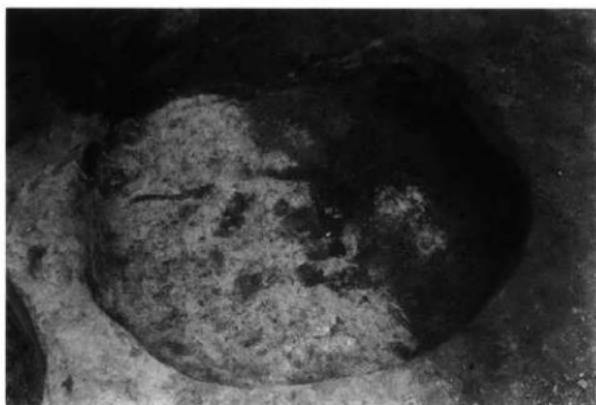


SM05断面

図版14 方角東遺跡 (HGH558)



SK64



SK65



作業風景



全景



全景

図版16 方角東遺跡 (HGH760)



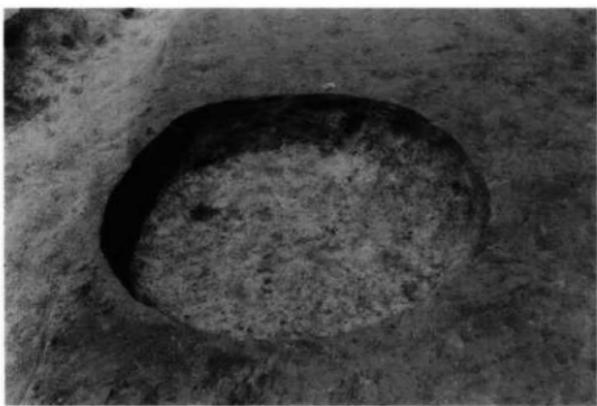
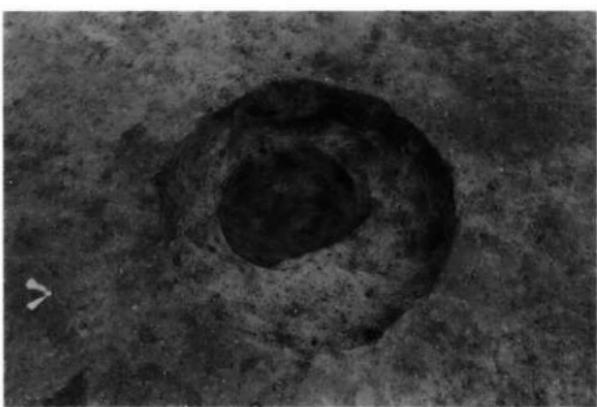
SM06



SM07



SM08





作業風景



重機作業風景



測量作業風景

報告書抄録

ふりがな	はばあけぼのいせき・ほうがくひがしいせき									
書名	羽場曙遺跡・方角東遺跡									
副書名										
巻次										
シリーズ名										
編著者名	坂井 勇雄・羽生 俊郎									
編集機関	長野県飯田市教育委員会									
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 ☎0265-22-4511									
発行年月日	西暦2008年3月(平成20年3月)									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
はばあけぼのいせき 羽場曙遺跡	いいだしはばちょう 飯田市羽場町 4丁目	20205	35° 30' 58"	137° 48' 53"	平成15年10月10日 ～23日 平成16年5月24日 ～6月1日	208m ²	区画整理			
ほうがくひがしいせき 方角東遺跡	いいだしはばちょう 飯田市羽場町 3丁目	20205	35° 30' 53"	137° 48' 29"	平成19年7月9日 ～8月21日	980m ²	区画整理 公園造成			
ほうがくひがしいせき 方角東遺跡	いいだしはばちょう 飯田市羽場町 4丁目	20205	35° 30' 44"	137° 48' 40"	平成17年7月15日 ～20日	55m ²	区画整理			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
はばあけぼのいせき 羽場曙遺跡	集落址	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中近世	住居址 住居址	土器・石器 土器・石器	弥生時代終末から古墳時代 前期の住居址が調査された。					
ほうがくひがしいせき 方角東遺跡	集落址	弥生時代 中近世	方形周溝墓 獨立柱建物址 土坑	石器	弥生時代後期とみられる方 形周溝墓が調査された。					
報告書要約										
弥生時代後期の住居址と方形周溝墓、古墳時代前期の住居址、中近世の土坑を調査。										

羽場曙遺跡・方角東遺跡

2008年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
長野県飯田市教育委員会
印 刷 飯田共同印刷㈱
